

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第6学年の児童

中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校、特別支援学校中学部の第3学年の生徒

(3) 調査の内容

教科に関する調査

- ・ 小学校調査 国語及び算数
- ・ 中学校調査 国語、数学及び英語

生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・ 児童生徒に対する調査（児童生徒質問紙調査）
- ・ 学校に対する調査（学校質問紙調査）

(4) 調査の方式

悉皆調査

(5) 調査の実施日

平成31年 4月18日（木）

(6) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校 16校 860名 中学校 8校 805名 北進小中学校を除く市内小中学校

* 学校質問紙調査の結果について

平成31年度の調査では、調査項目が大幅に変更となり、これまでの分析に用いていた多くの質問項目が使用できなくなった。このため、次の4観点から質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。

千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。

千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。

児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下 -3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下 -5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下 -7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

小学校教科全体		国語	算数
平均正答数	千歳市	8.9問/14問	8.9問/14問
	全道	8.8問/14問	9.0問/14問
	全国	8.9問/14問	9.3問/14問
平均正答率	千歳市	63%(63.4%)	63%(63.4%)
	全道	63%(62.8%)	64%(64.5%)
	全国	63.8%	66.6%
全道との比較		同様	同様
全国との比較		同様	やや低い

本年度の調査から、「主として『知識』に関する問題」と「主として『活用』に関する問題」の区分を見直し、知識と活用力を一体的に調査する問題への変更が行われたが、内容的には従前の「主として『活用』に関する問題」であるB問題に極めて近いことから、領域別の分析については、過去のB問題の結果を用いて比較・検討することにした。

国語については、全国に0.4ポイント届かなかったが全国と「同様」という結果であった。

算数については、全国を3.2ポイント下回り、全国と比較して「やや低い」という結果であった。

国語については、前年度、B問題の全国との差は-5.9ポイントあったが、今年度は、前年度を大きく上回り全国との差を-0.4ポイントに縮め、全国と同様の水準となった。

領域別では、四領域すべてで前年度を上回り全国との差が縮まった。中でも「伝統的な言語文化と国語に関する事項」については、上昇幅が大きく全国を上回った。

算数については、前年度、全国との差が拡大し全国より「相当低い」という結果であったが、今年度は、平成29年度の水準にまで回復し、全国より「やや低い」状況となった。

領域別では、国語と同様に、四領域すべてで前年度を上回り全国との差が縮まった。中でも「図形」領域は2年連続上昇が見られ、全国とほぼ同様の水準となっている。

(2) 中学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

中学校教科全体		国語	数学	英語
平均正答数	千歳市	6.8 問/10 問	8.5 問/16 問	10.9 問/21 問
	全道	7.2 問/10 問	9.3 問/16 問	11.4 問/21 問
	全国	7.3 問/10 問	9.6 問/16 問	11.8 問/21 問
平均正答率	千歳市	68% (67.8%)	53% (53.4%)	52% (51.9%)
	全道	72% (72.1%)	58% (58.1%)	54% (54.2%)
	全国	72.8%	59.8%	56.0%
全道との比較		やや低い	やや低い	ほぼ同様
全国との比較		低い	低い	やや低い

国語については、全国を5ポイント下回り、全国と比較し「ほぼ同様(下位)」から「低い」段階となった。

数学については、全国を6.4ポイント下回り、全国と比較し「ほぼ同様(下位)」から「低い」の段階となった。

英語については、全国を4.1ポイント下回り、全国と比較し「やや低い」段階である。

国語については、全国を5ポイント下回り、全国との差も前年度より2.7ポイント広がった。

領域別では、「話すこと・聞くこと」は、前年度を大きく下回り、全国との差が広がった。「書くこと」は前年度を上回り全国との差が縮まったが、「読むこと」は、2年連続前年度を下回り、低下傾向が見られる。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、前年度を上回ったものの依然として全国を下回る状況が続いている。

数学については、全国を6.4ポイント下回り、全国との差も前年度より4.5ポイント広がった。

領域別では、「図形」は、上昇傾向が見られるものの依然として全国との差が大きい状況である。「数と式」は、前年度を下回り低迷状況が続いている。「関数」は、これまで全国と同様の水準で推移してきたが、本年度は大きな低下が見られる。「資料の活用」は、上昇傾向が続いていたが、大きく低下し、平成28年度以降最も低い正答率であった。

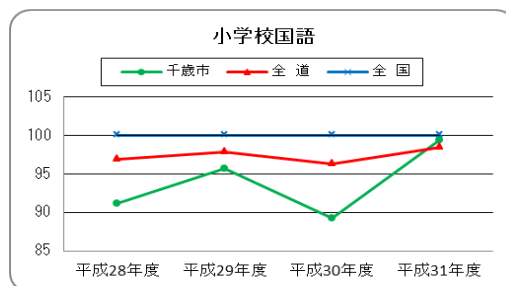
英語は、全国を4.1ポイント下回り、全国と比較して「やや低い」段階である。

領域別では、「聞くこと」は全国を上回ったが、「書くこと」「読むこと」については、全国を大きく下回り課題が見られる。

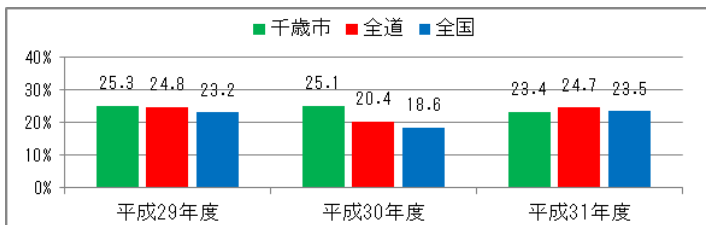
(3) 小学校国語

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

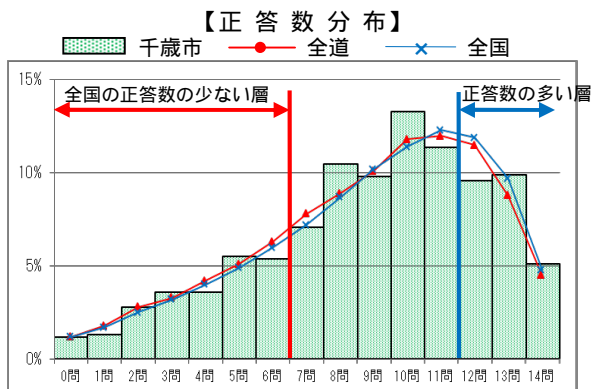
	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
千歳市	52.7 91.2	55.0 95.7	48.8 89.2	63.4 99.4
全道	56.0 96.9	56.3 97.9	52.7 96.3	62.8 98.4
全国	57.8 100	57.5 100	54.7 100	63.8 100



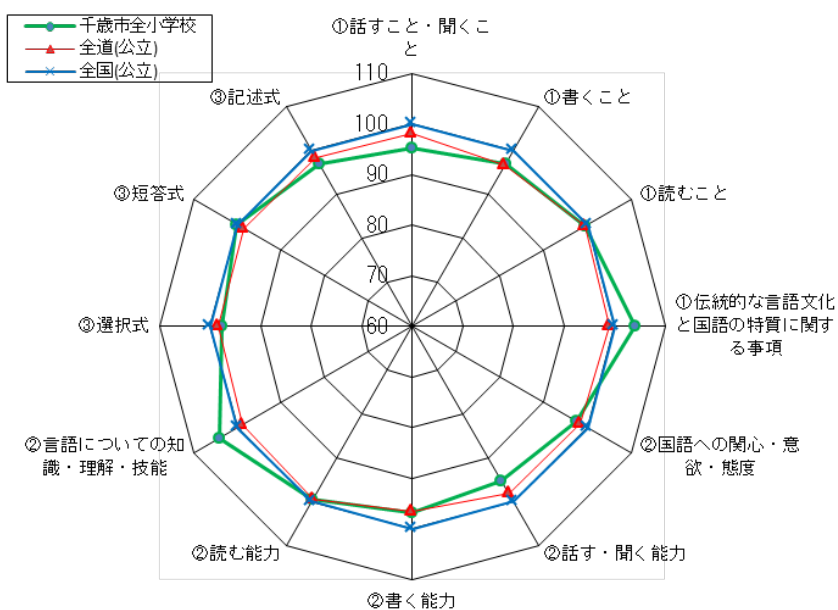
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



正答数の少ない層の割合は、全国と同水準となり下位層の底上げが図られている状況が見られる。正答数の多い層の割合は、全国よりやや低い状況となっている。



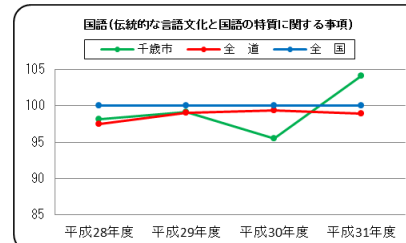
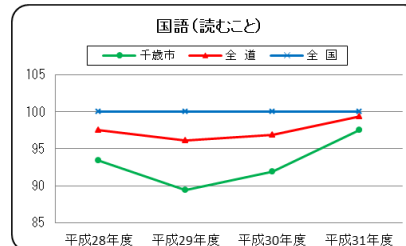
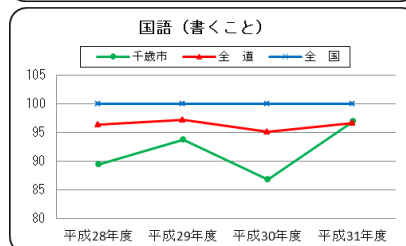
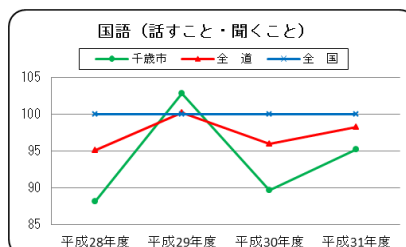
【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



四領域すべてにおいて前年度の成績を上回り、国語全体の平均正答率は全国と同様となった。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、大きな伸びが見られ全国を上回った。「書くこと」と「読むこと」については、全国には届いていないが、前年度の成績を上回り、改善が図られている様子が見られる。「書くこと」の能力が高まったことにより、これまで課題となっていた記述式問題の正答率も向上している。(全国を100とした指数で前年度84.6、本年度97.0)

「読むこと」については、上昇傾向が続いており、全国との差も過去最少となっている。「話すこと・聞くこと」については、前年度の成績を上回ったものの、依然として全国との差が大きい状況が見られる。

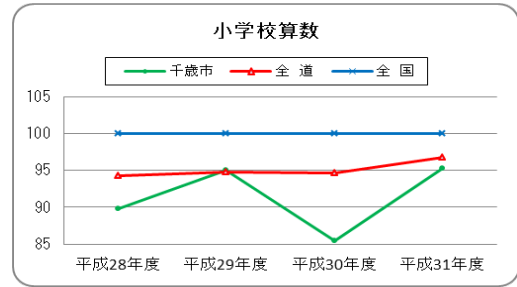


平成28年度から平成30年度まで国語B問題に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する問題が出題されていないので、平成28年度から平成30年度までの数値については、国語Aのデータを使用しています。

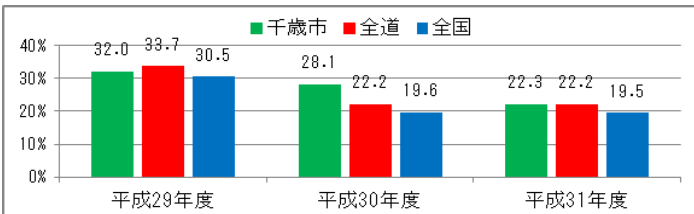
(4) 小学校算数

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

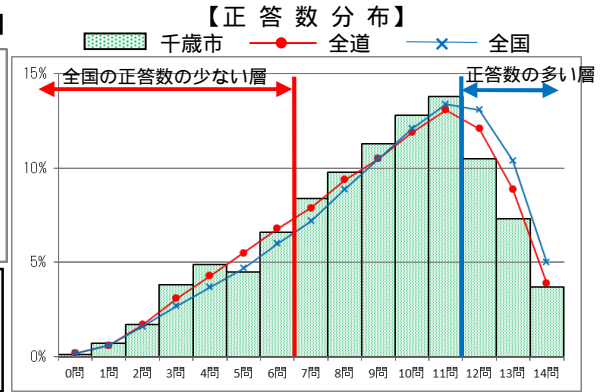
	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
千歳市	42.4 89.8	43.6 95.0	44.0 85.4	63.4 95.2
全道	44.5 94.3	43.5 94.8	48.7 94.6	64.5 96.8
全国	47.2 100	45.9 100	51.5 100	66.6 100



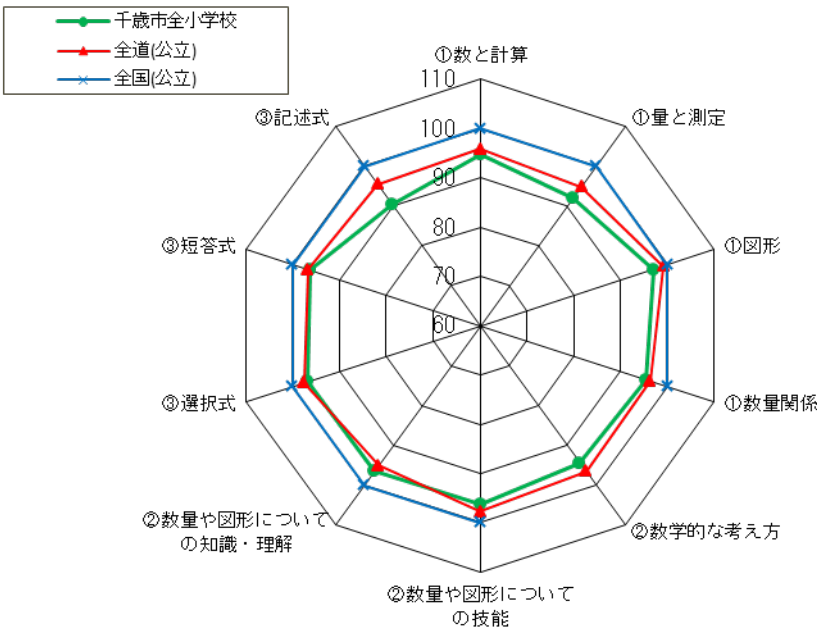
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



正答数の少ない層の割合は、全国より2.8ポイント高いが、差は縮小しており改善が見られる。正答数の多い層の割合については、全国より低い状況となっている



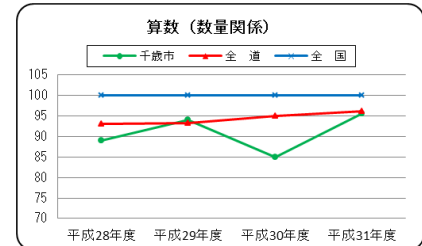
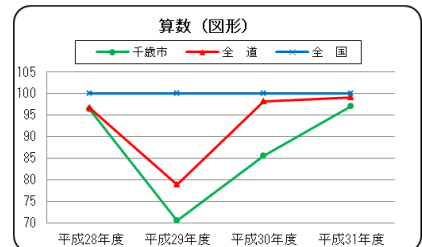
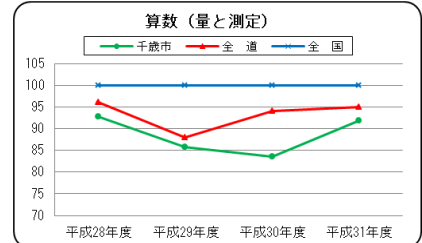
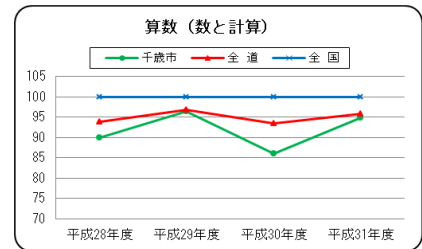
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



四領域すべてにおいて前年度の成績を上回っており、活用力の向上が図られている様子が見られる。

主として「活用」に関する問題であるB問題については、全国との差が大きく活用力の向上が重要な課題となっていたが、本年度は、すべての領域において前年度の正答率を上回り、活用力の向上が図られている様子が見られる。四領域の中でも「図形」領域については、上昇傾向が続いており、全国と「ほぼ同様」の水準となっている。

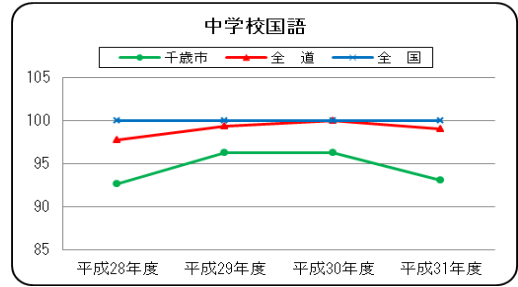
本市のもう一つの課題である「事実」や「方法」、「理由」を言葉や数、式を使って記述することについては、全国の正答率を100とした指数で90.5（前年度80.6）と改善が見られる。記述式問題の正答率の上昇が四領域の正答率向上の要因と考えられる。



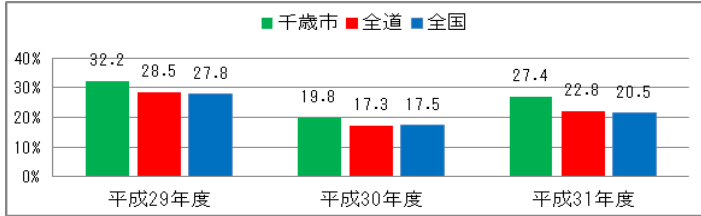
(5) 中学校国語

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

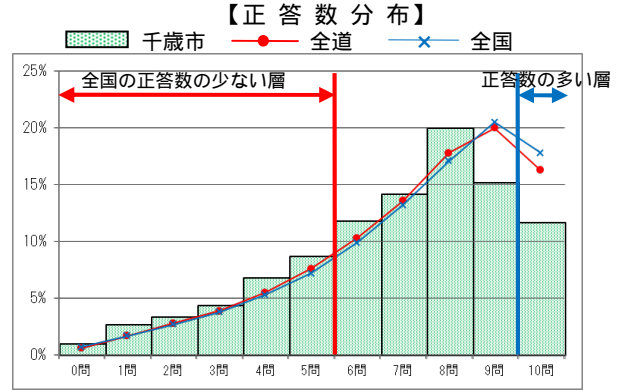
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度
千 歳 市	61.6 92.6	69.5 96.3	58.9 96.2	67.8 93.1
全 道	65.0 97.7	71.7 99.3	61.2 100	72.1 99.0
全 国	66.5 100	72.2 100	61.2 100	72.8 100



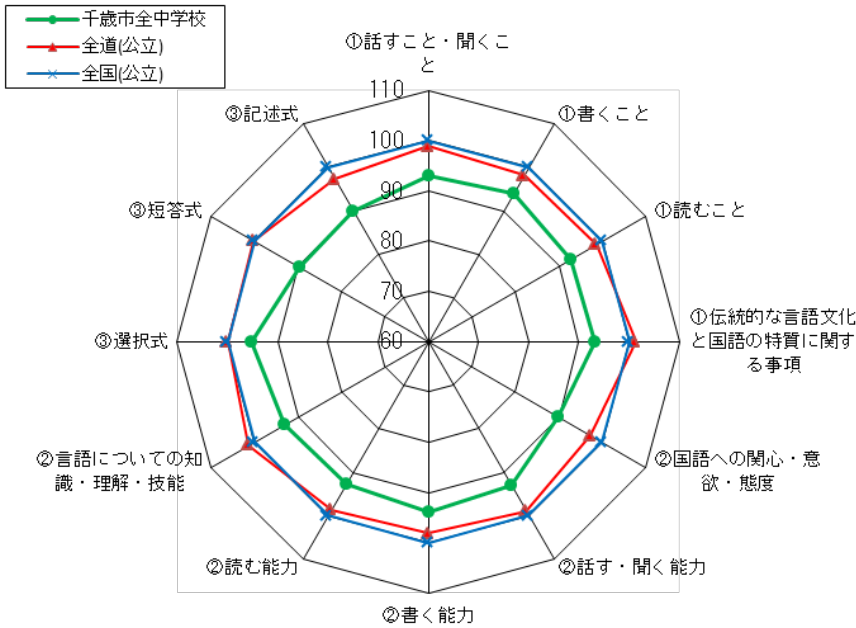
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】



正答数の少ない層の割合は、全国より 6.9 ポイント高く、差は広がっている。正答数の多い層の割合については相当低い状況となっている。

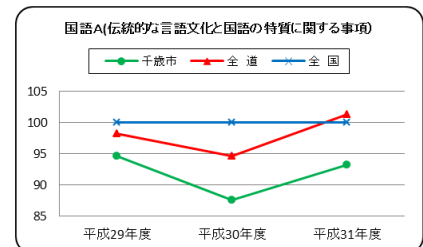
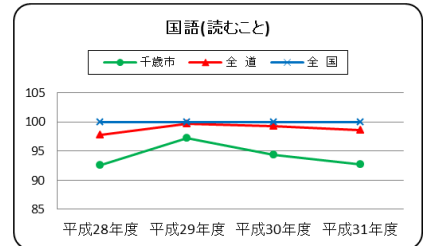
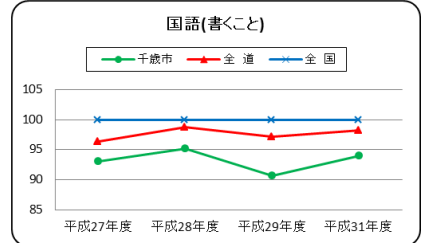
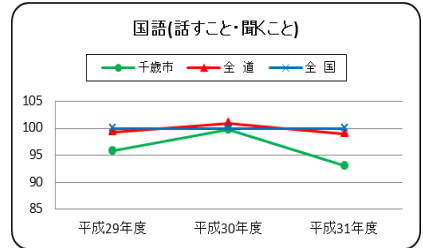


【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



全国との差が広がり、全国より「低い」状況である。領域別では、「書くこと」は、横ばいで推移しているが、「読むこと」は、低下傾向が見られる。

「書くこと」は、前年度を上回ったが、依然として全国との差が大きい状況が見られる。また、「書くこと」と関連が強い記述式問題の正答率については、全国を 100 とした指数で 89.9 (前年度 96.0) と低下が見られる。「読むこと」については、平成 28 年度以降、全国を 100 とした指数で 92~97 の範囲で推移しているが 2 年連続前年度を下回り低下傾向が見られる。「話すこと、聞くこと」については、記述式問題の正答率が全国より 9.7 ポイント低く、この領域全体の正答率に大きな影響を与えている。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、「知識」に関する問題であるが、全国との差は依然として大きく、知識の確実な定着に課題が見られる。

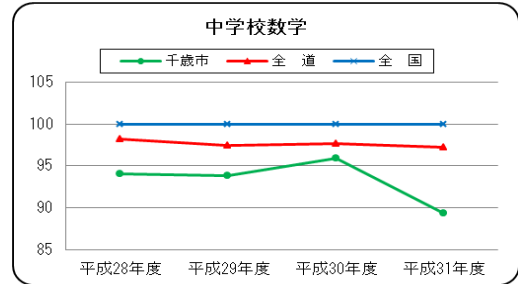


平成 28 年度の B 問題に「話すこと、聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は出題されていなかったため、この 2 つの領域については、平成 29 年度以降のグラフとなっています。

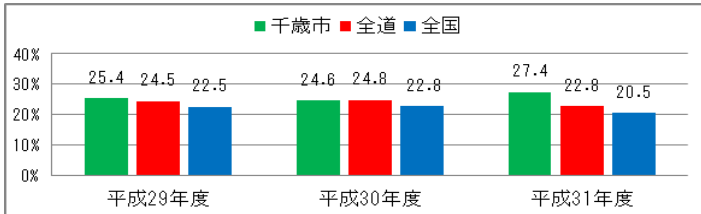
(6) 中学校数学

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
千歳市	41.5 94.1	45.1 93.8	45.0 95.9	53.4 89.3
全道	43.3 98.2	46.9 97.5	45.8 97.7	58.1 97.2
全国	44.1 100	48.1 100	46.9 100	59.8 100

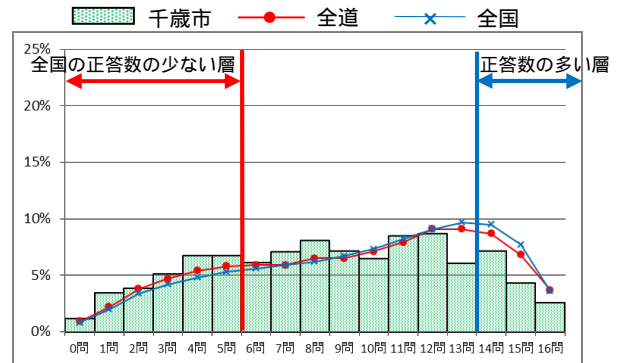


【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】

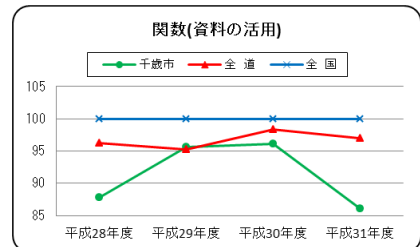
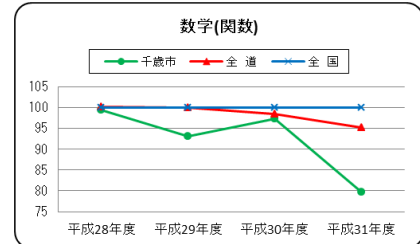
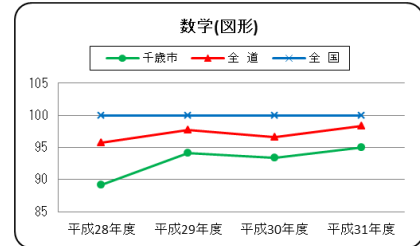
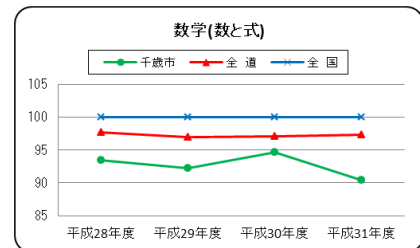
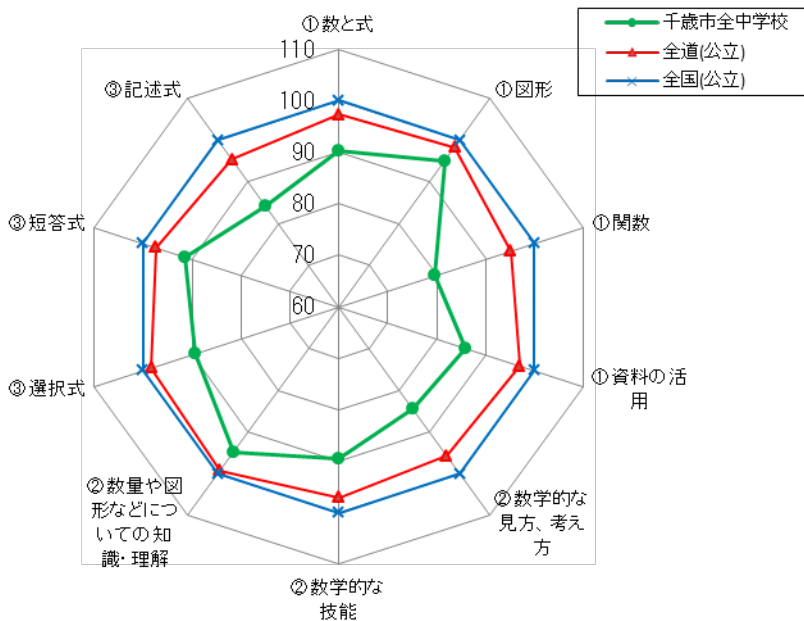


正答数の少ない層の割合は、全国より7.5ポイント高く差は広がっている。正答率の多い層の割合は、全国より相当低い状況となっている。

【正答数分布】



【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



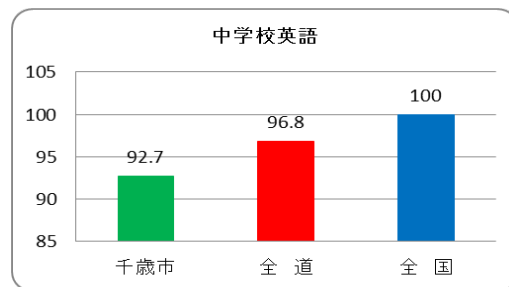
全国との差が広がり、全国より「低い」状況である。領域別では、「図形」は横ばいの状況が続いているが、「数と式」「関数」「資料の活用」は前年度を下回った。

「数と式」は、前年度を下回り低迷状況が続いている。「図形」については、平成29年度以降、大きな変化は見られず、横ばい状況が続いている。「関数」は、平成28年度に出題された問題と同一の問題が出題された。千歳市、全国ともに平成28年度の正答率を上回ったが、千歳市の上昇幅2.4に対して全国は13.4であった。「資料の活用」については、ヒストグラムや代表値を使って資料を考察する問題の正答率が低く前年度を大きく下回った。「記述式問題」については、4問出題されたが全国平均正答率を100としたときの指数が84.1と前年度を3.4ポイント下回り、論理的に考える力や数学的に表現する力の育成に課題が見られる。

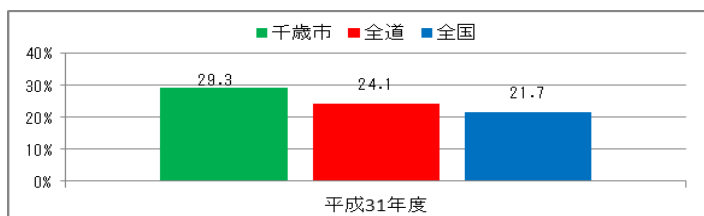
(7) 中学校英語

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

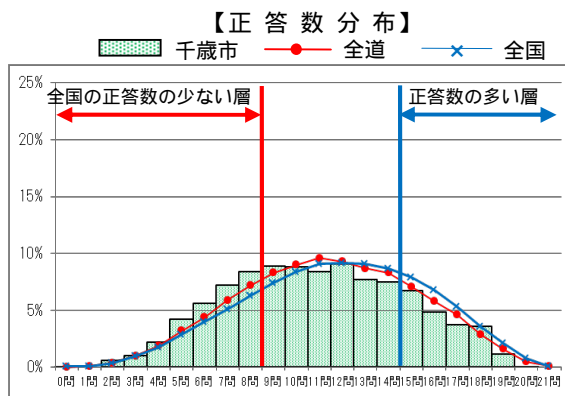
平成31年度	
千歳市	51.9 92.7
全道	54.2 96.8
全国	56.0 100



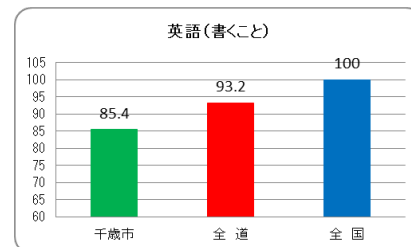
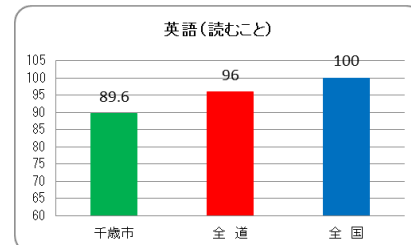
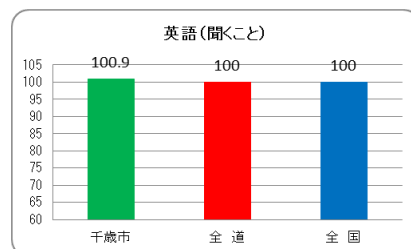
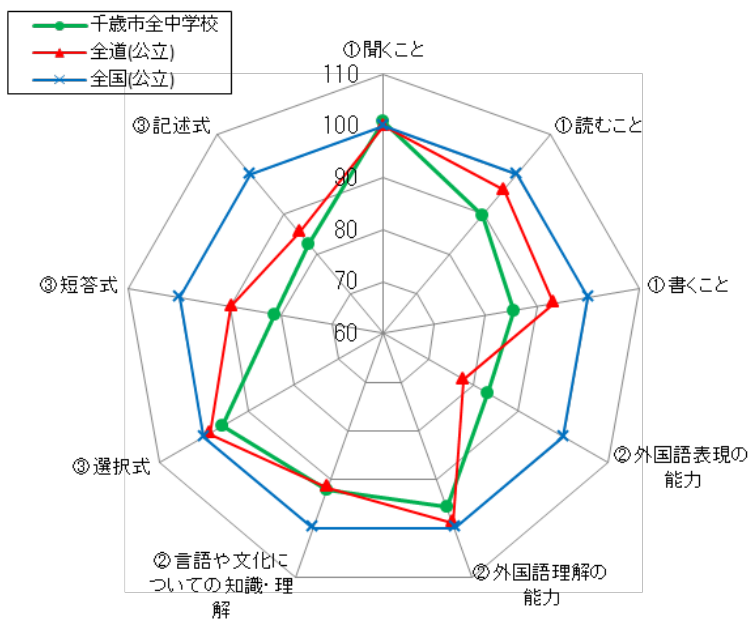
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】



正答数の少ない層の割合が全国より高く、正答数の多い層の割合が全国より低い状況となっている。



【区分別集計結果と領域別正答率】



全国との平均正答率の差は4.1ポイントで、全国より「やや低い」状況である。領域別では、「聞くこと」は全国を上回ったが、「読むこと」と「書くこと」は全国を大きく下回った。

「話すこと」については、調査は行われましたが、その結果は公表されていません。

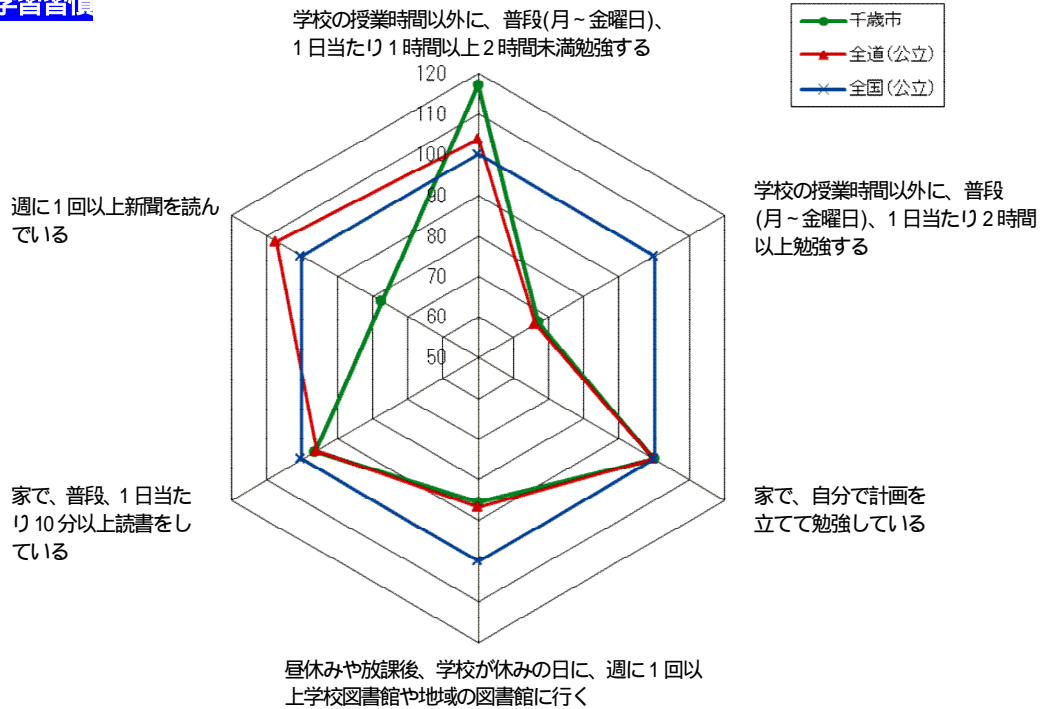
「聞くこと」については、7問中4問が全国の上回り、領域全体の平均正答率は全国を上回った。「読むこと」については、6問出題されたが、全国の上回った問題は1問だけで、この領域全体の平均正答率は全国を大きく下回った。「書くこと」についても、出題された8問中、全国を上回った問題は1問で、全国との差は「読むこと」より大きい状況となっており、「読む力」「書く力」の育成に課題が見られる。

3 児童生徒質問紙の結果

平成 31 年度の調査では、児童質問紙の質問項目が多数変更されている。学習習慣に関する調査については、「家で学校の宿題をしている」「家で学校の授業の予習・復習をしている」の2つの質問が削除されたことから、この2つの質問項目に替えて、新たに「学校図書館・地域図書館の利用」の1項目を取り上げることとした。自己有用感・規範意識に関する調査については、「地域の問題・出来事への関心」「ボランティア活動への参加」の2つの質問が削除されたことから、この2つの質問に替えて、新たに「地域行事への参加」と、教師との関わりの面から「先生は、間違えたところや理解していないところを、分かるまで教えてくれる」の2項目を取り上げることとした。

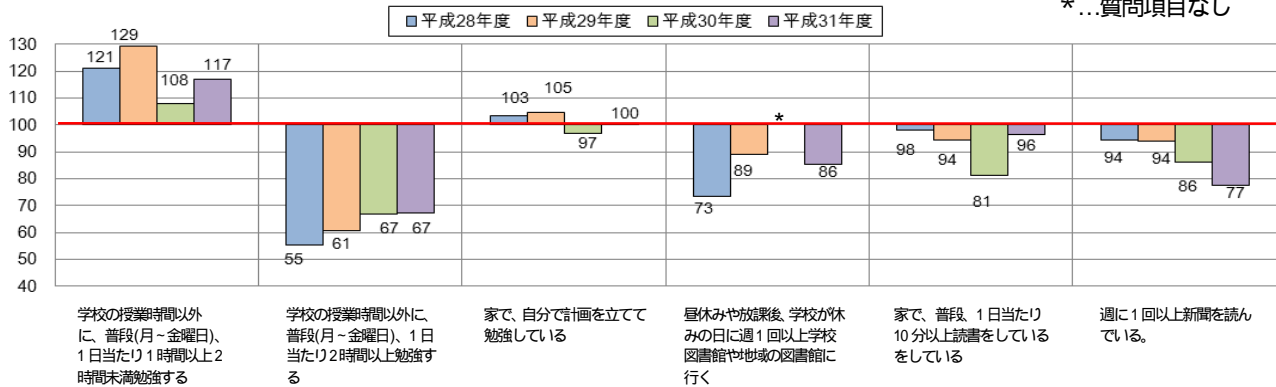
さらに、中学校の「数学」に関する質問が大幅に削除され、新たに「英語」に関する質問が実施されたことから、本年度の教科関係については、小学校は「国語」と「算数」、中学校は「国語」と「数学・英語」とする。

(1) 小学校学習習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）

*...質問項目なし

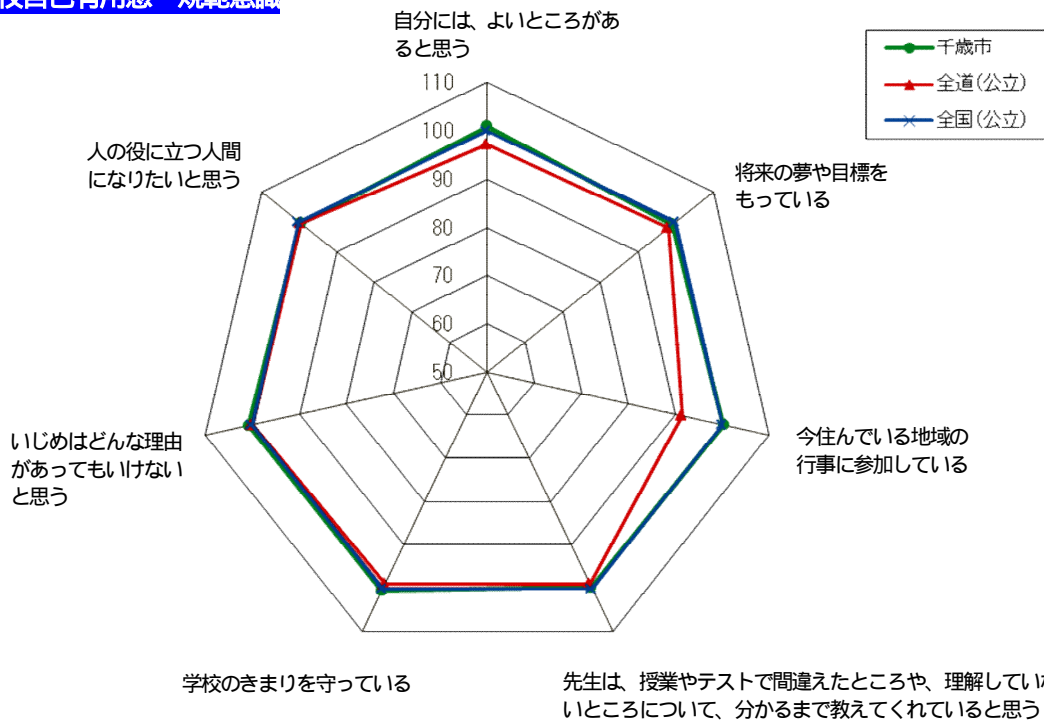


普段の学習時間や図書館を利用する回数が全国に比べて少ない状況が見られる

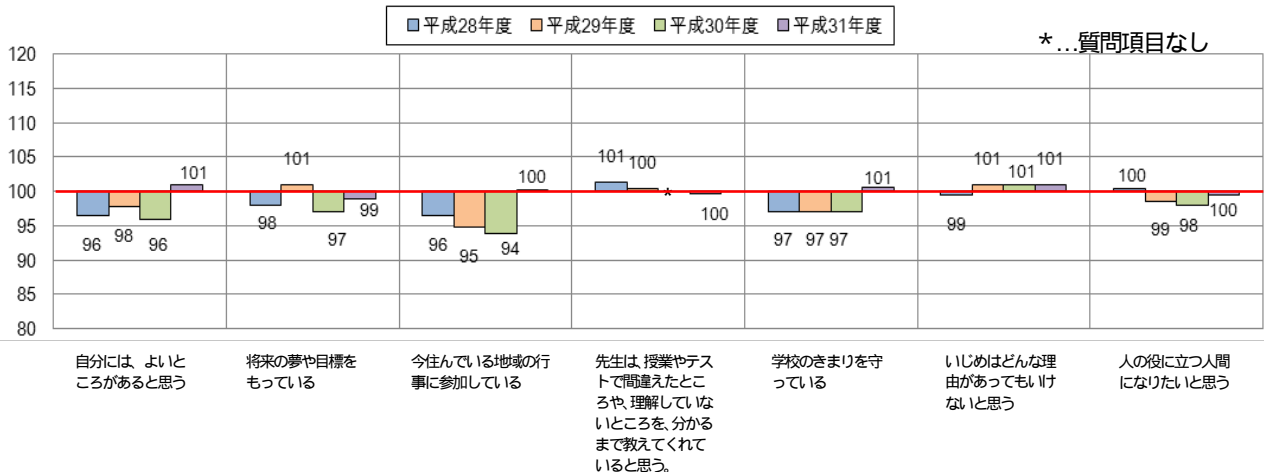
本年度の調査においても、「普段、1時間以上2時間未満勉強する」児童が全国を大きく上回っており、各学校が取り組んできた「学年×10分+10分の家庭学習」が定着している状況が見られる。1週間の総学習時間を増やすことが千歳市の課題であることから、今後も「学年×10分+10分の家庭学習」の基準を超えて学習する児童を増やすとともに、休日の学習時間を確保する取組を全市的に展開していくことが大切である。

昨年度から取上げた「読書」については、「家で10分以上読書をする」児童の割合は、大きく改善し全国に近づいているが、図書館の利用については全国より相当低くなっている。このため今後も、読書時間・図書館の利用や勉強時間の変化と教科に関する調査結果の関係を捉えていくこととする。

(2) 小学校自己有用感・規範意識



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



自己有用感・地域との関わり・規範意識の高まりが見られる

自己有用感・規範意識については、各項目とも全国と同様又はほぼ同様の結果となっている。

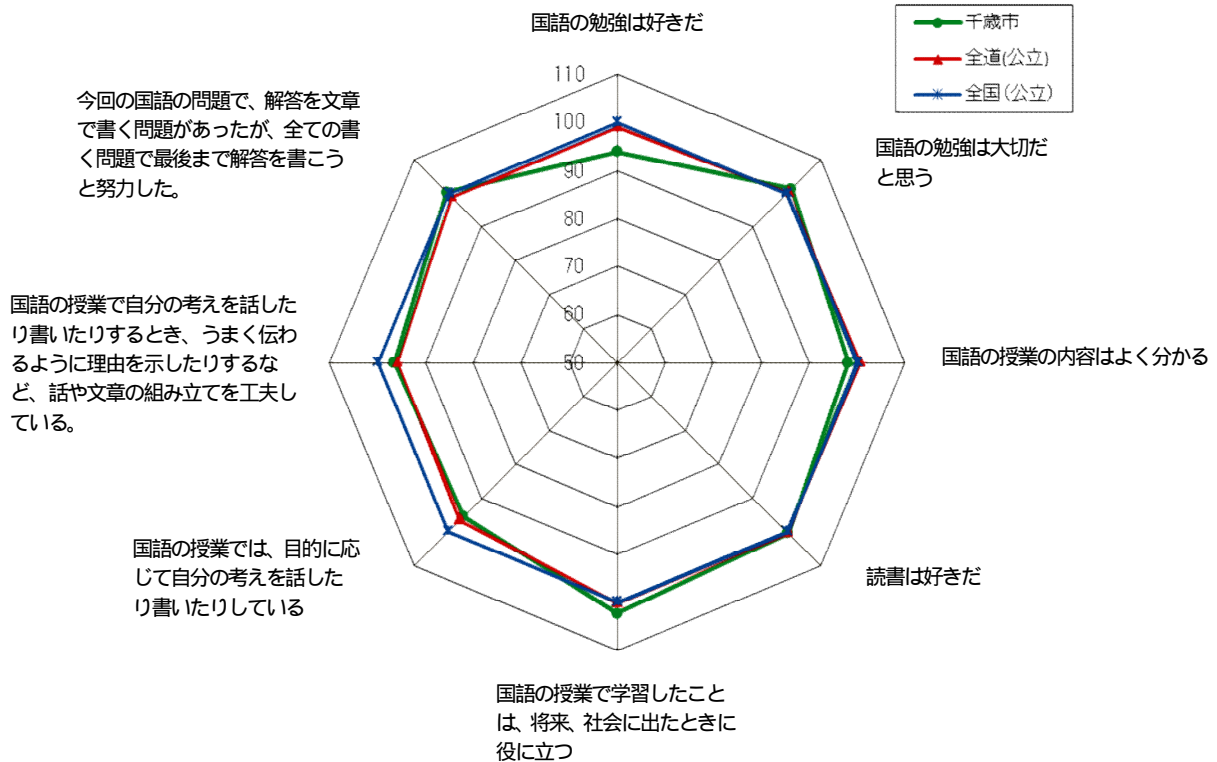
自己有用感については、「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持っている」と回答した児童の割合は、前年を上回り、全国とほぼ同様となっている。地域との関わりについては、地域行事に参加している児童の割合が前年を大きく上回り、全国と同様となっており、行動で地域と関わろうとする児童が増加している。

教師との関わりについて、学校質問紙には無く、児童質問紙だけにある内容として「先生は分かるまで教えてくれる」を取上げ、回答状況は全国と同様となっている。

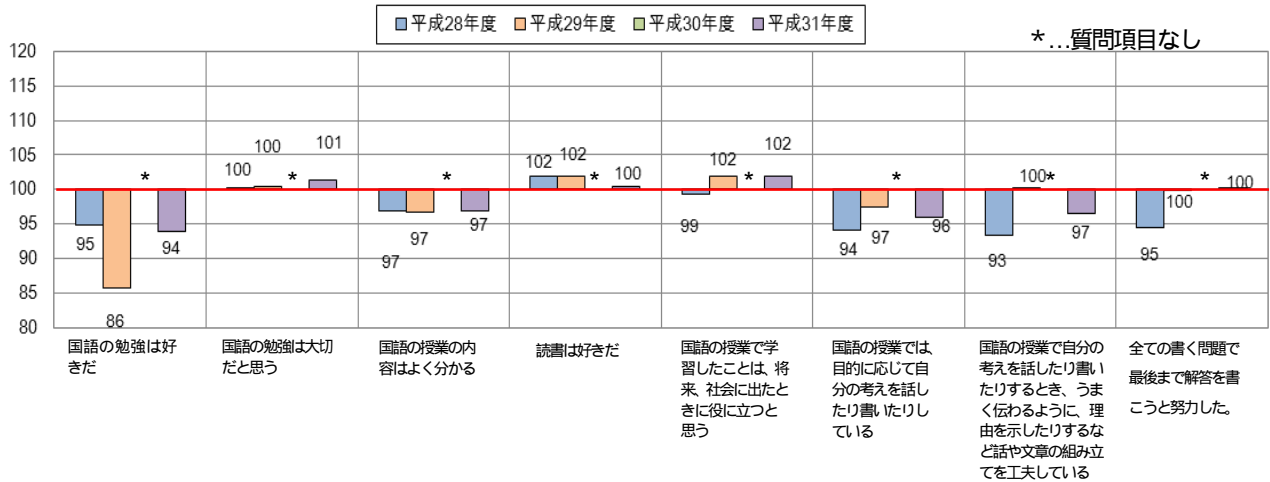
規範意識については、「学校のきまりを守っている」児童の割合が、ここ数年の結果を上回り、全国とほぼ同様となっている。他者理解については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した児童は、全国とほぼ同様であり、「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した児童も全国と同様となっており、各学校が行っている「いじめ根絶」の取組の成果が見られる。

今後もハイパーQI検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自己有用感を一層高めていくとともに、他者を思いやる心を育てていく取組を展開していくことが大切である。

(3) 小学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「国語の勉強が好きだ」は低い状況が続き、書く問題への解答意欲が高まっている

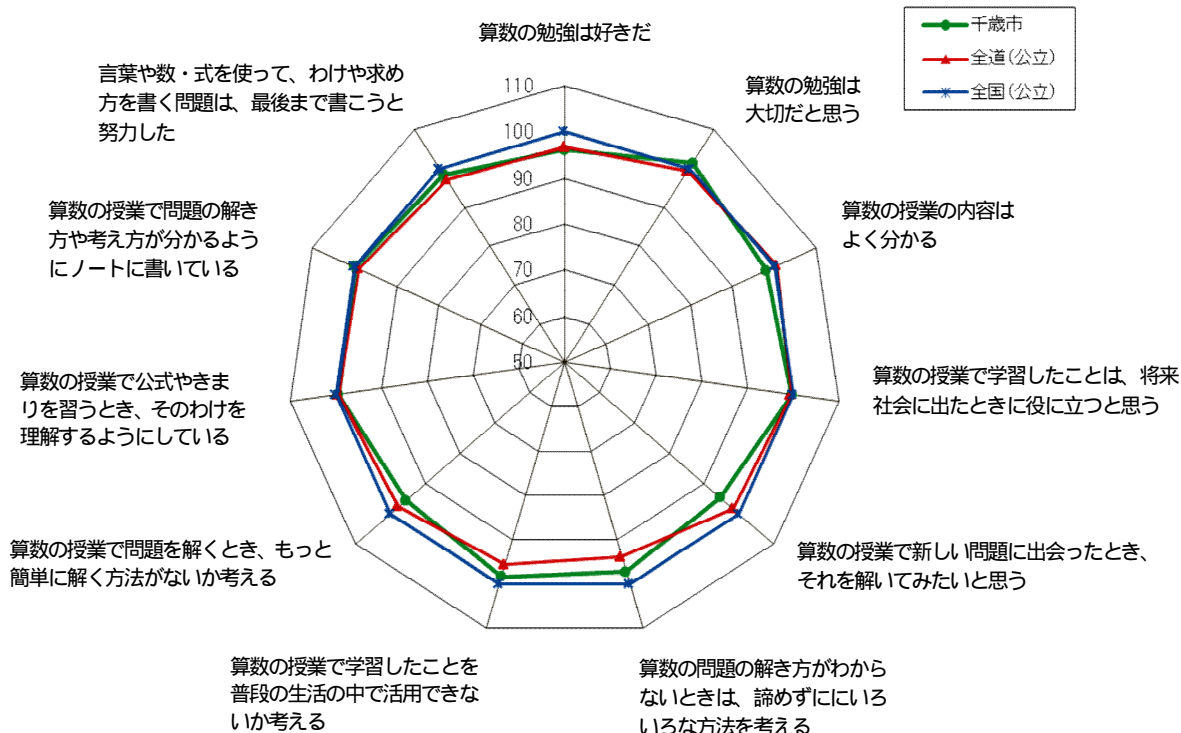
国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強は大切だ」「国語の授業の内容はよく分かる」「将来役に立つ」と回答した児童の割合が全国とほぼ同様となっており、「読書は好き」と回答した児童の割合は全国と同様となっている。一方、「国語の勉強は好きだ」は前回を上回ったが、全国より低い状況となっている。

国語の学び方については、「目的に応じて自分の考えを話したり書いたりしている」と回答した児童の割合は全国よりもやや低く、「自分の考えを話したり書いたりするとき、うまく伝わるように、話や文章の組み立てを工夫している」と回答した児童の割合は全国とほぼ同様となっている。

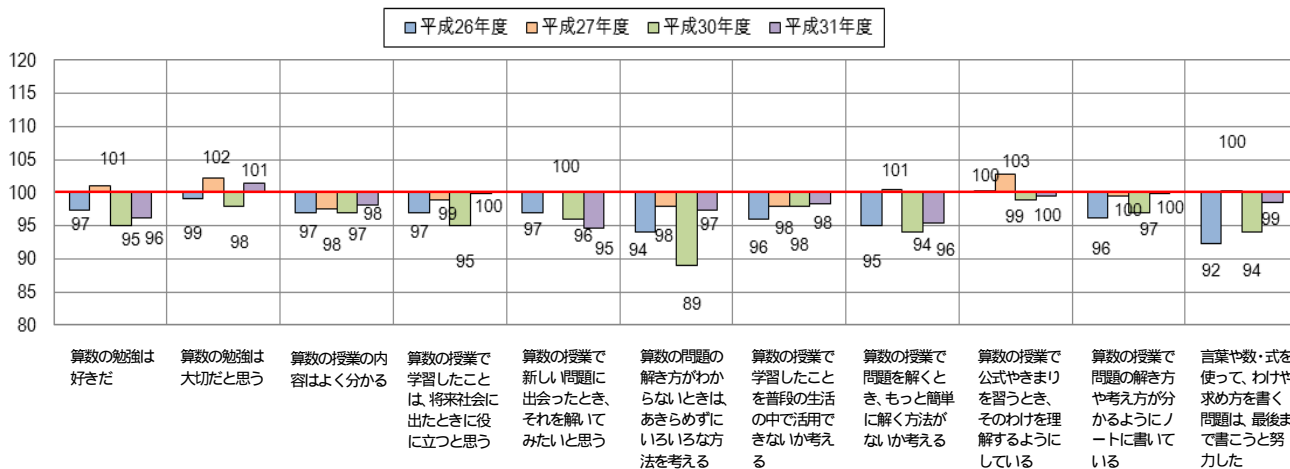
「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童の割合は、2回連続して全国と同様となっており、各学校で行っている、記述問題への取組の成果が見られる。

各学校において、児童の実態を分析し、デジタル教科書や学校図書館の効果的な活用と併せて、国語科での言語活動の充実に取組み、児童の関心・意欲・態度を高めていく必要がある。

(4) 小学校算数



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「算数の勉強が好きだ」はやや低い状況が続いている。ほぼ全ての項目で前年を上回っている

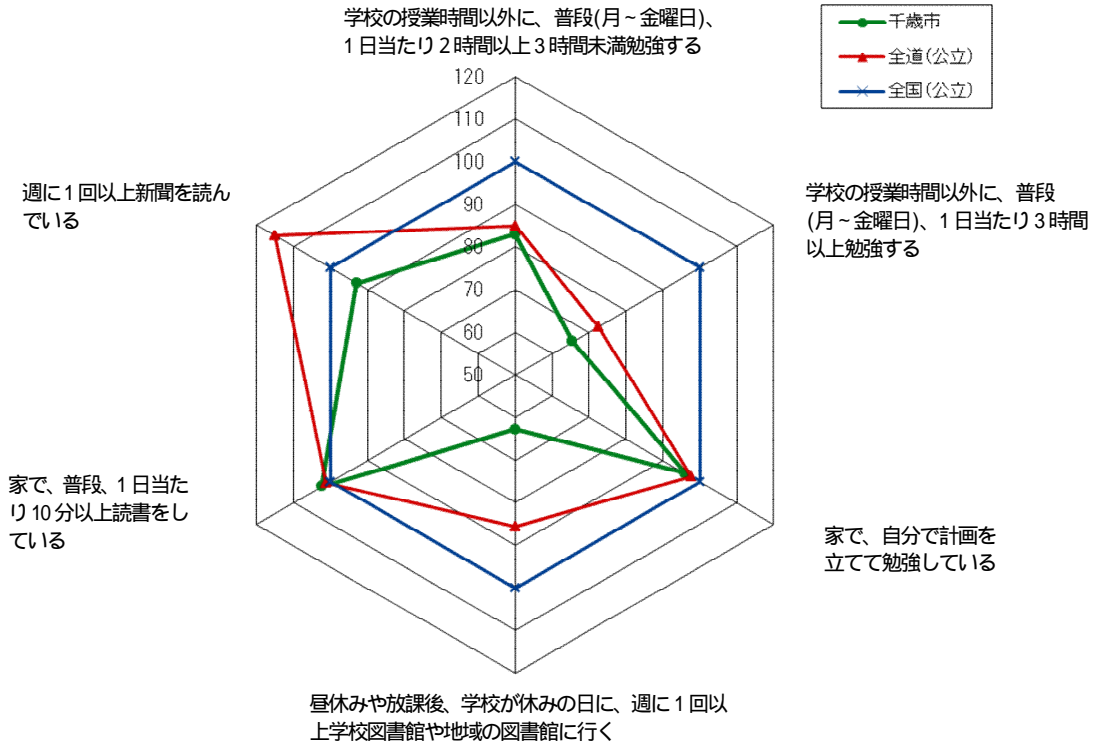
算数に関する関心・意欲・態度に関しては、「算数の勉強は大切」と回答した児童の割合が全国とほぼ同様、「算数の授業で学習したことは将来役に立つ」と回答した児童の割合が全国と同様となっており、算数への有用性を感じる児童が増えている。また、「算数の勉強が好き」「算数の授業の内容はよく分かる」と回答した児童の割合は、全国を下回ってはいるが前年を上回っており、改善傾向が見られる。

算数の学び方については、「公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」と回答した児童が全国と同様となっており、各学校の主体的な学びに対する取組の成果が見られる。

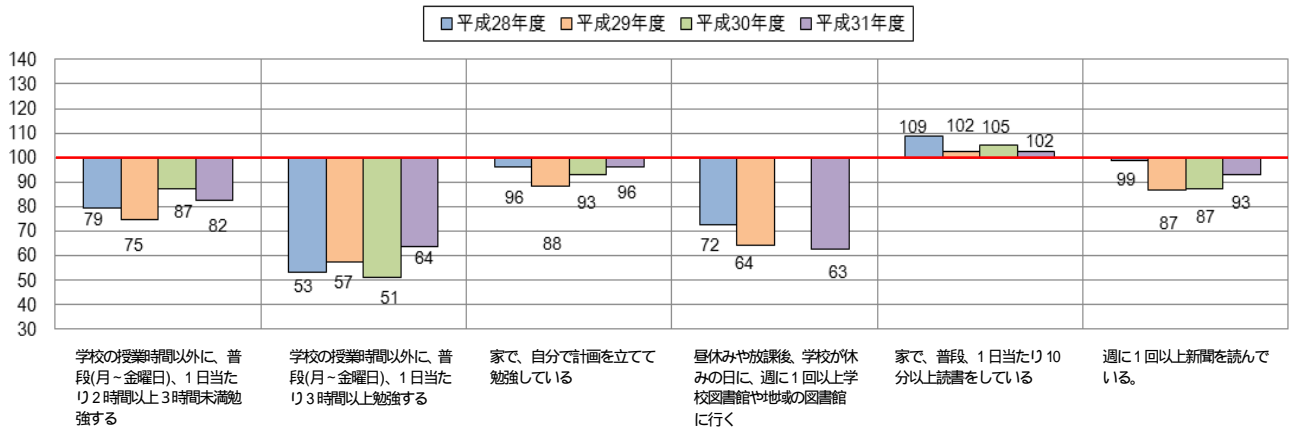
「言葉や数・式を使ってわけや求め方を書く問題は、最後まで書こうと努力した」と回答した児童の割合は、前年を大きく上回ってほぼ全国と同様となり、記述式問題への取組みに成果が見られる。

今後も、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導のよさを生かし、主体的に問題の解決に取り組む活動を積極的に取り入れた授業を工夫し、算数に対する関心・意欲・態度を一層高め、「算数が好き」な児童を育てていくことが大切である。

(5) 中学校学習習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）

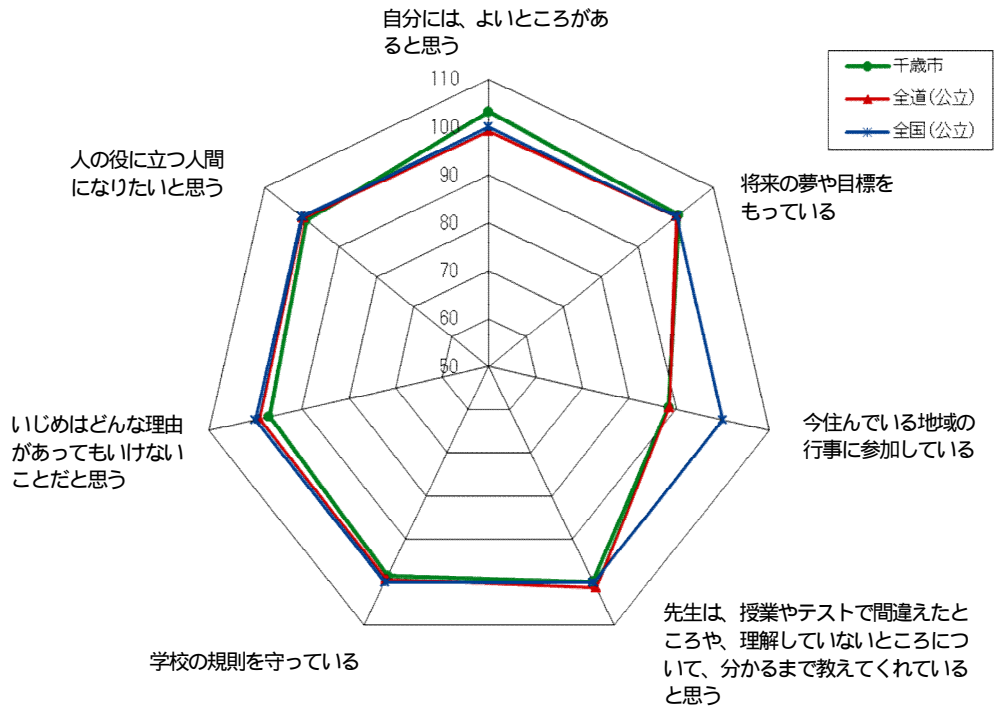


家庭での学習時間が少ない状況が続いている

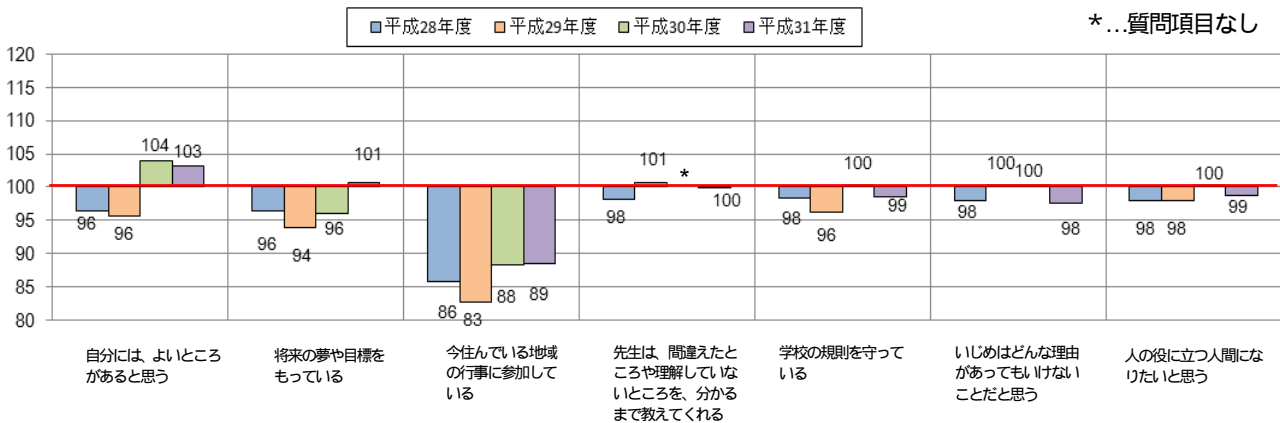
家庭での学習時間については、学校が奨励している平日「2時間以上3時間未満」勉強すると回答した生徒の割合はやや減少し、依然、全国よりも相当低い状況が続いている。「普段、3時間以上勉強している」生徒の割合はやや増加したが、全国よりも相当低い状況であり、家庭での学習時間を増やす取組を全市的に展開していく必要がある。「自分で計画を立てて勉強している」生徒の割合は、前年度を上回り改善が見られる。家庭での学習時間を増やすため、引き続き、授業と連動する家庭学習の仕方を指導したり、生徒の努力を積極的に認め賞賛したりするなどの取組を通して、主体的に学習しようとする態度を育む必要がある。

活用力の育成が千歳市の重要な課題となっているが、活用力を高めていくためには、複数の資料を関連付けて読み取ったり、情報を比較検討したりする能力が必要となる。新聞を読むことは、このような能力を高める効果があり、読書についても「すべての時間を勉強に費やすより、いくらかの時間を読書に割いた方が教科の学力が高い」ことが確認されている。本年度の調査では、「1日に10分以上、読書をしている」生徒の割合は全国とほぼ同様となっているが、「週に1回以上新聞を読む」生徒の割合は全国を相当下回っている。本年度から取り上げた「図書館を利用する回数」も全国を大きく下回っており課題がみられる。

(6) 中学校自己有用感・規範意識



過去4年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



自己有用感が高く、地域行事への参加に低い状況が見られる

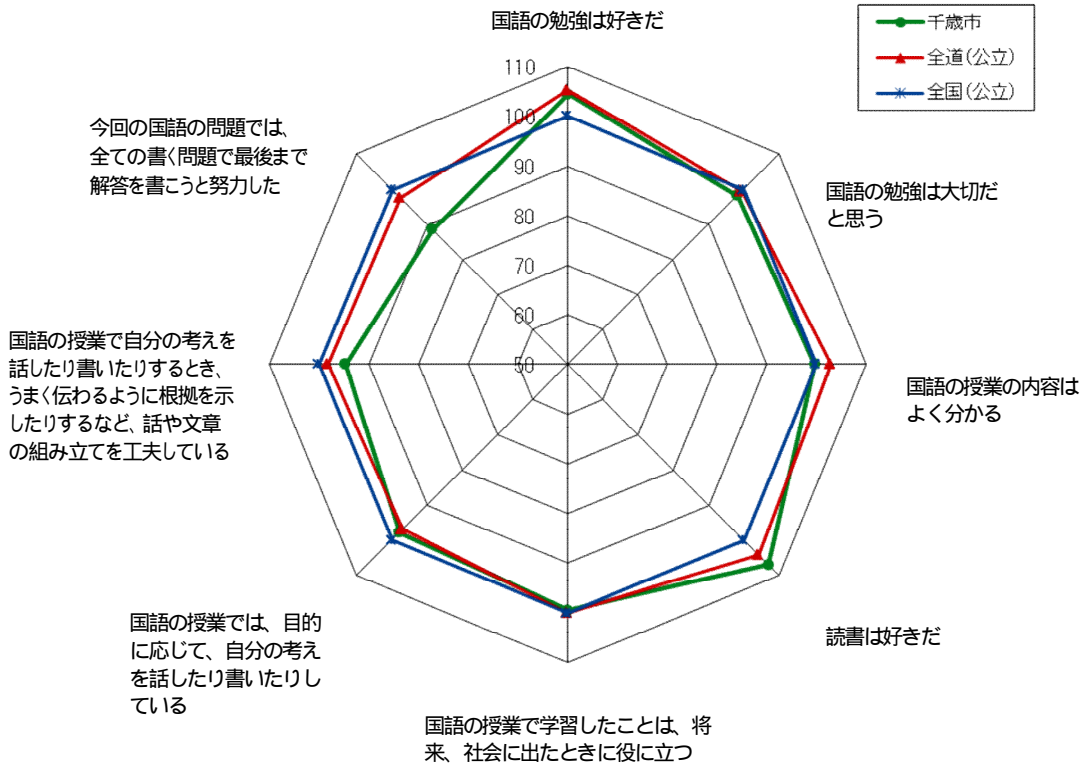
自己有用感については、「自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒の割合が、前年度に引き続き全国よりもやや高く、「将来の夢や目標もっている」も全国とほぼ同様となっており、各学校の取組の成果が見られる。地域との関わりについては、「今住んでいる地域の行事に参加している」生徒の割合は、全国を相当下回っており、積極的に参加できていない状況が見られる。

規範意識については、「学校の規則を守っている」と回答した生徒の割合は、前年度をやや下回ったが、全国とほぼ同様の状況となっている。

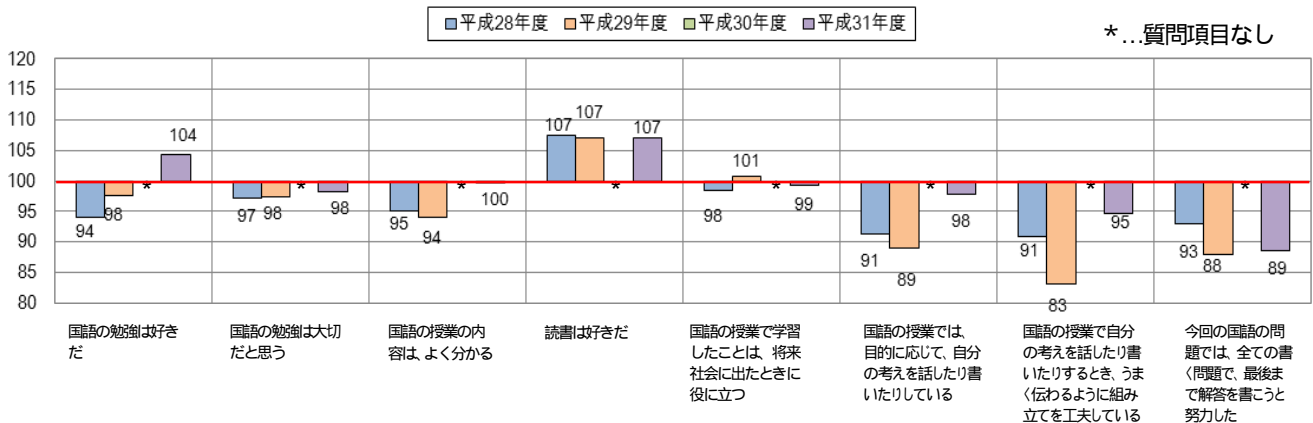
他者理解については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した生徒の割合は全国よりもやや低く、「人の役に立つ人間になりたいと思う」は、全国とほぼ同様となっており、これまで同様、各学校で「生徒によるいじめ撲滅」運動をしっかりと行っていく必要がある。

ハイパーQI 検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自尊感情を一層高めていくとともに、他者を思いやる心を育てていく取組を展開していくことが大切である。

(7) 中学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



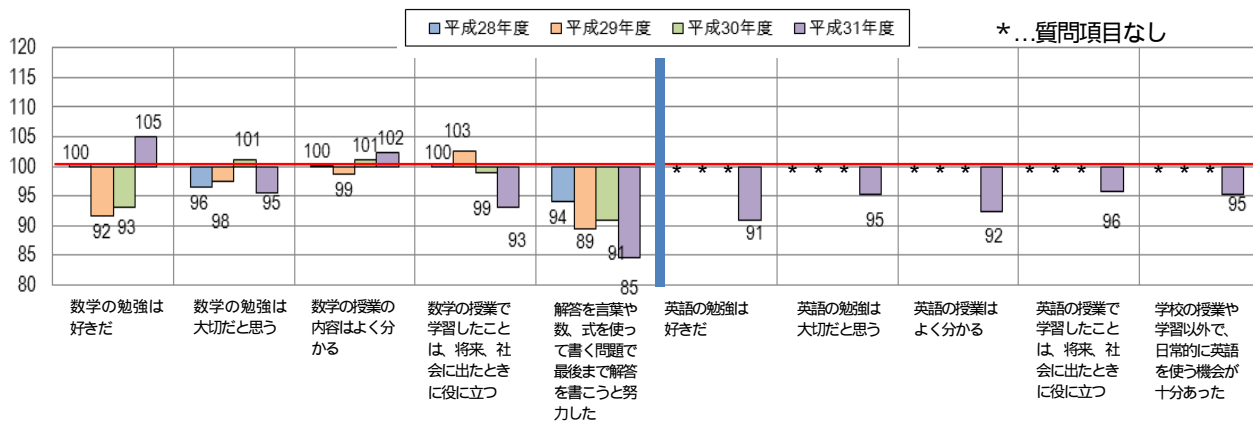
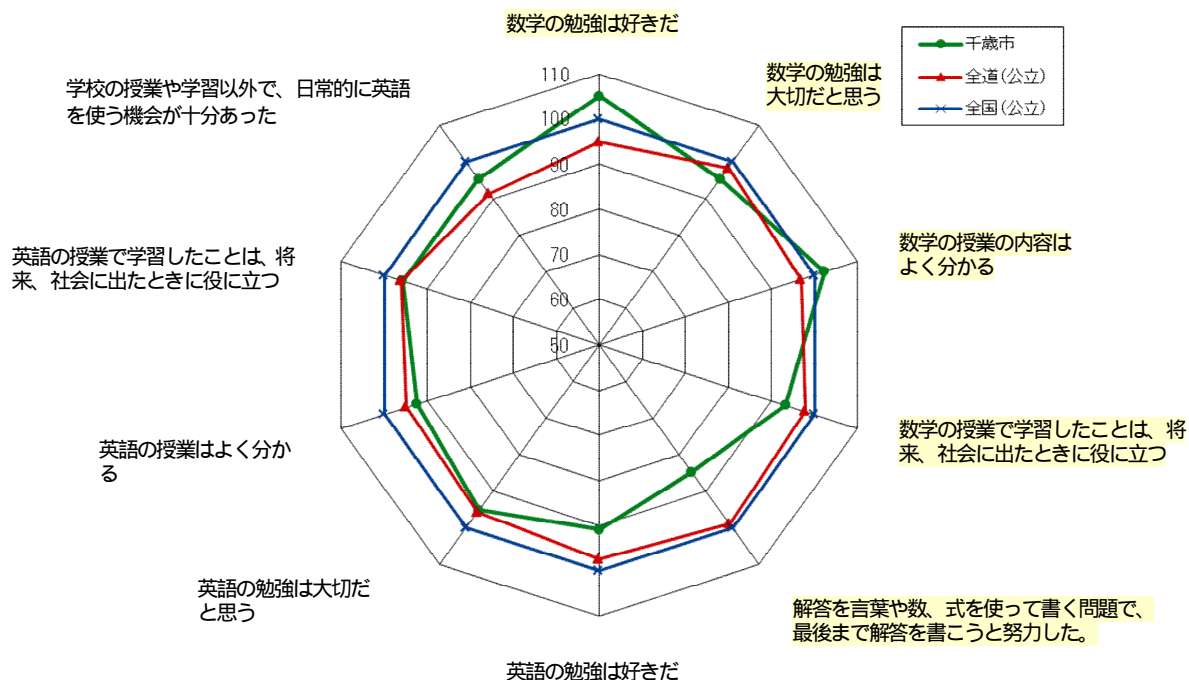
「国語の勉強が好きだ」が全国を上回り、国語の学び方も改善傾向が見られる

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強が好きだ」と回答した生徒の割合が全国よりやや高く、「読書が好き」が全国より相当高くなっている。また、「国語の勉強は大切」「国語の授業の内容はよく分かる」「国語の授業で学習したことは、将来役に立つ」についても全国と同様かほぼ同様となっている。

国語の学び方については、「目的に応じて、自分の考えを話したり書いたりしている」と回答した生徒の割合が全国とほぼ同様、「自分の考えを話したり書いたりするとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」が全国より低くなっている。2つの項目ともに前回は大きくうわまわっており、各学校による主体的な学習への取組の成果が見られる。一方「全ての書く問題で、最後まで解答を書こうと努力した」では、前回と変わらず全国より相当低くなっており、国語の学力調査の結果にも直結している。

今後の改善の視点として、単元で身に付けた力を生かし、原因と結果、意見と根拠などを論理的に捉え、自分の考えとして表現する取組を進めるとともに、読書や新聞など授業以外で文字に触れる機会を増やしていくことも重要である。

(8) 中学校数学・英語



数学好きの生徒の割合は大きく伸びたが、有用性を感じていない生徒が増えている

「数学が好き」と回答した生徒の割合は全国よりも高くなり、「授業の内容はよく分かる」と回答した生徒は全国とほぼ同様となっており、どちらも前年を上回っている。

一方、「数学の勉強は大切」と回答した生徒の割合は全国よりも低く、「数学は将来社会に出たときに役に立つ」は全国よりも相当低くなっており、数学の学習に有用性を感じることができない生徒が増えている。

「言葉や数、式を使って書く問題で、最後まで解答を書こうと努力した」と回答した生徒の割合は全国を大きく下回り、ここ4年間で最も低くなっている。今後も、解き方や考え方を書くことを重視した授業を工夫し、筋道を立てて考える力、言葉や数・式を使って数学的に表現できる力を高めていく必要がある。

英語に対する関心・意欲・態度が低く、日常的に英語を使う機会も少ない傾向が見られる

「英語の勉強は好きだ」「英語の授業はよく分かる」と回答した生徒の割合は、ともに全国より相当低くなっている。また、「英語の勉強は大切だ」と回答した生徒の割合は全国よりも低く、「英語は将来社会に出たときに役に立つ」は全国よりもやや低くなっており、生徒の英語への関心・意欲・態度を高める授業への配慮が重要となっている。

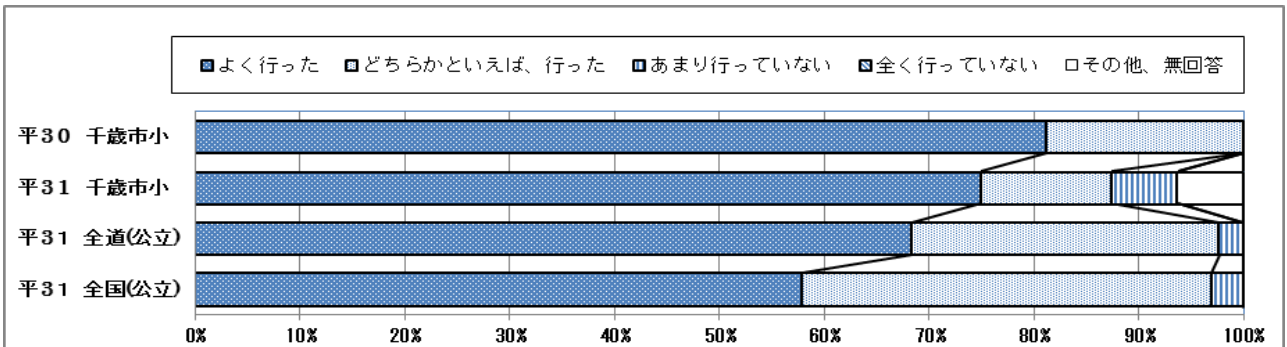
「学校の授業や学習以外で日常的に英語を使う機会が十分ありましたか」についても全国より低くなっており、継続的に英文を書いたり読んだりする学習活動に取り組み、日常的に英語に接する機会を作っていくことが大切である。

4. 学校質問紙の結果

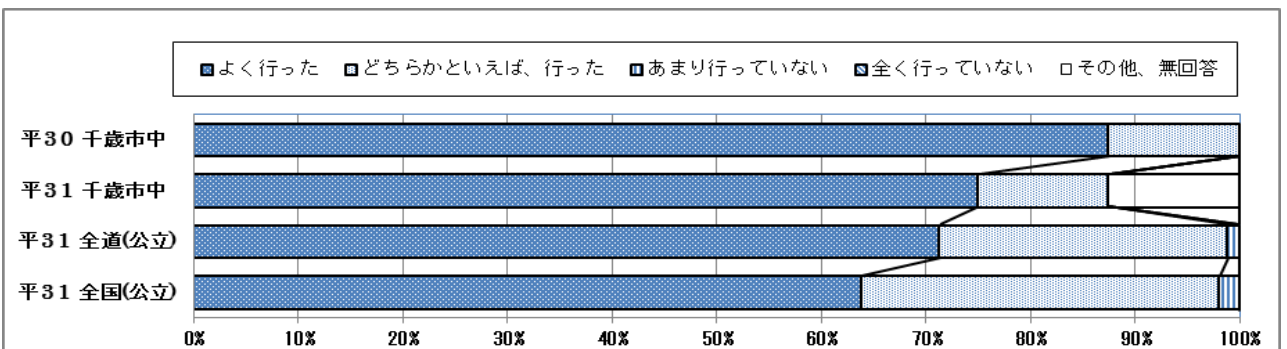
1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

学習規律～維持徹底

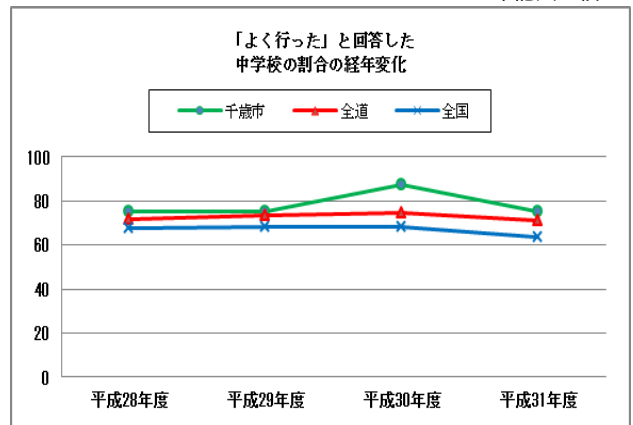
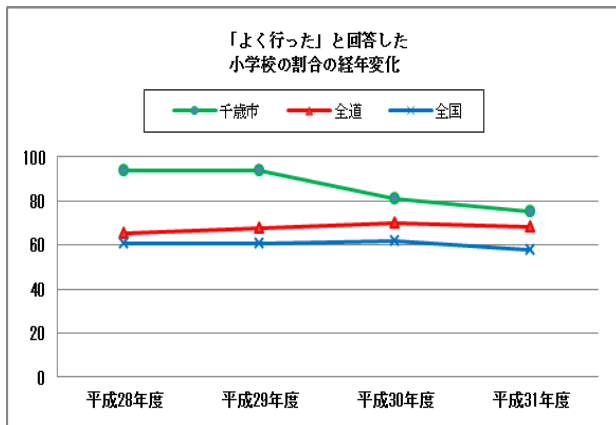
質問番号	質問事項
13	学習規律（私語をしない、話をしている人のほうを向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守る）の維持を徹底しましたか。



*調査対象学年の児童が前年度在籍していない小学校が市内に1校あり、前年度までの指導に関する質問8項目に関しては無回答で処理している。



*未記入1校

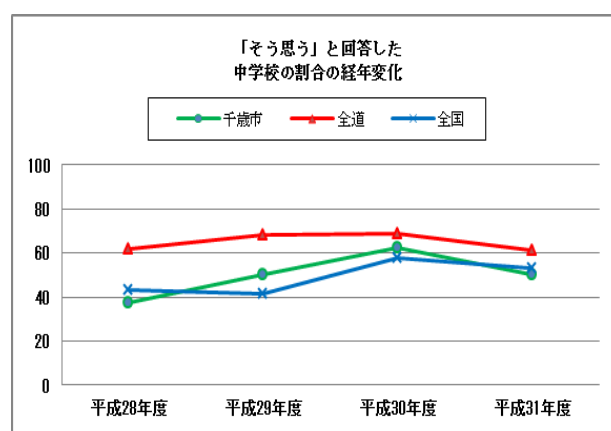
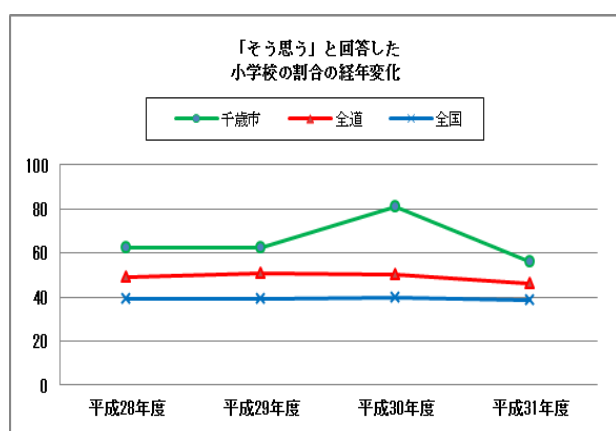
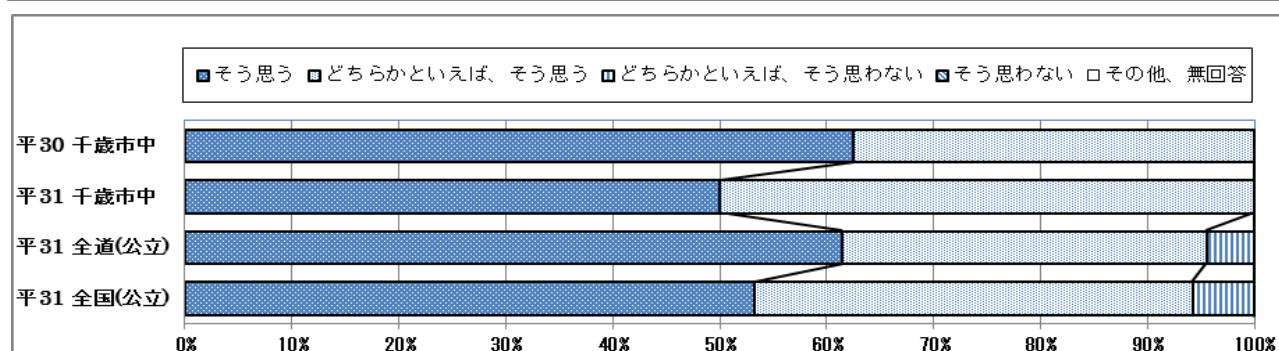
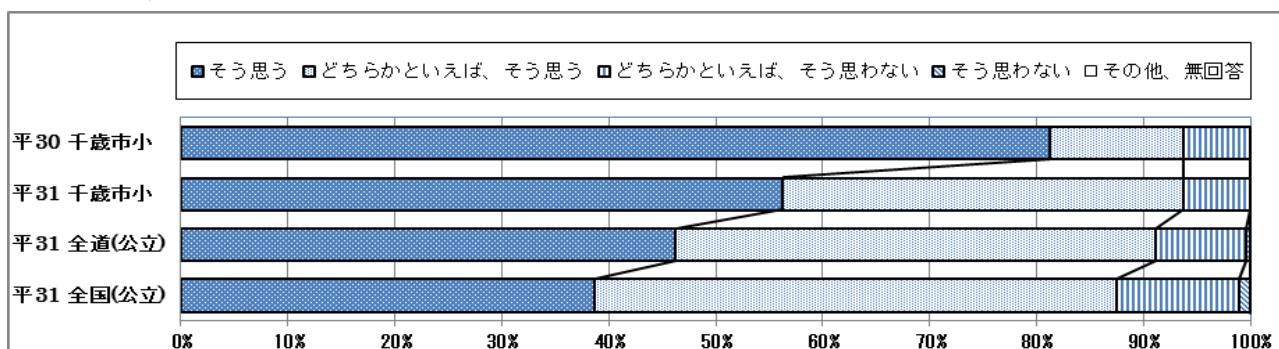


小・中学校、全ての学校において徹底が望まれる

学習規律の維持・徹底を「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校、中学校とも全国(小 57.8%、中 63.8%) を上回っているものの、小学校は 75.0% で 2 年連続減少し、中学校も 75.0% に留まっている。学習規律の維持・徹底については市内のすべての学校が学校改善プランに位置付け、その実現を目指し全校的な取組を展開してきているが、本年度の調査では「よく行った」と回答した学校が減少している状況が見られ、取組の減速が懸念される。各学校においては、学習に集中できる環境を整え、児童生徒の学力の向上が図られるよう学習規律の維持・徹底に取り組んでいくことが大切である。

学習規律～落ち着いた学級

質問番号	質問事項
9	調査対象学年の児童（生徒）は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。



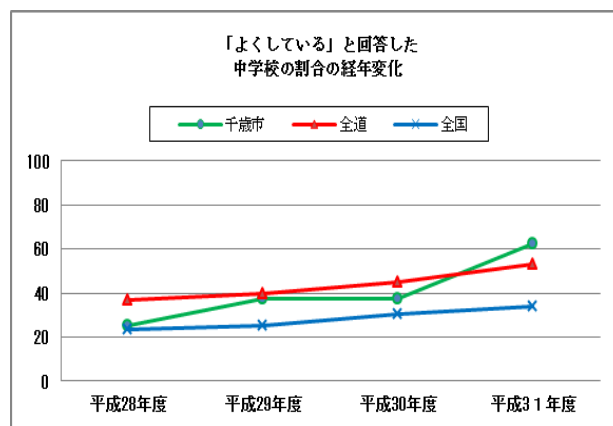
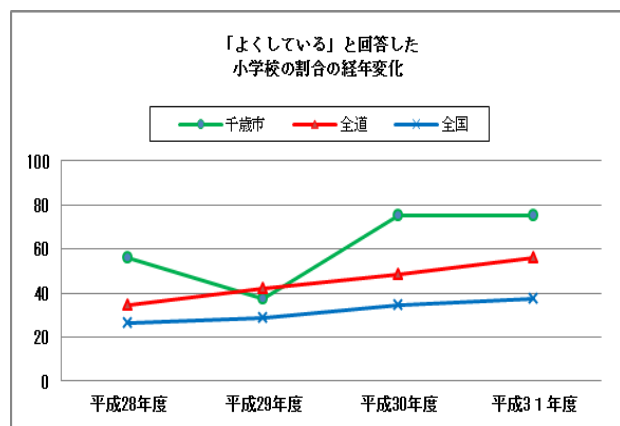
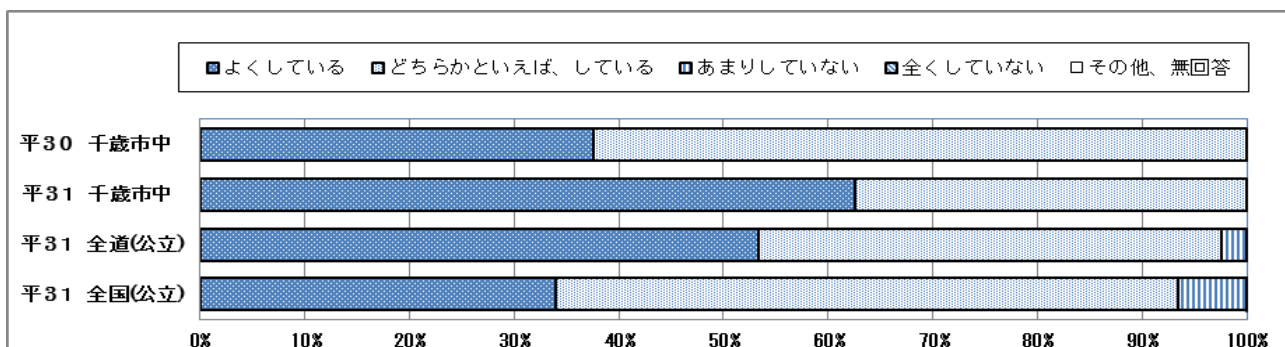
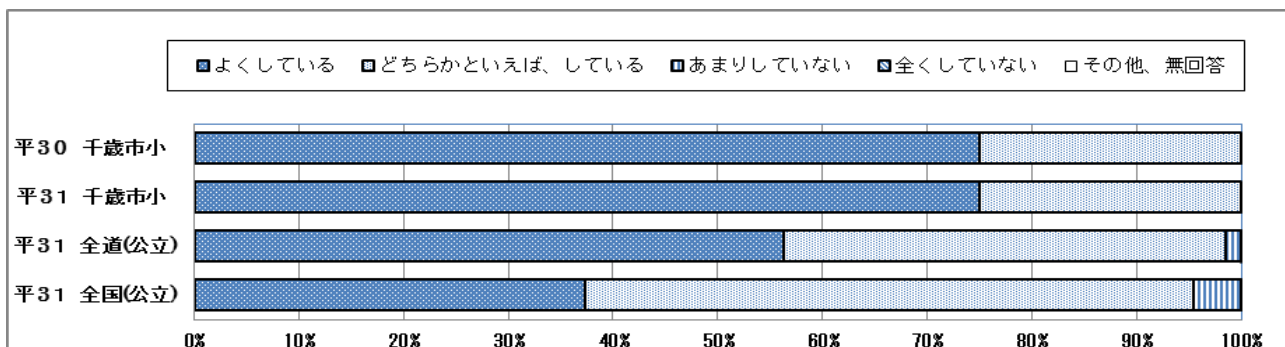
小・中学校ともに減少している

「そう思う」と回答した学校は、小学校、中学校ともに昨年より減少している。小学校では、「そう思う」と回答した学校が56.3%であり、全国（38.8%）を上回っているが、昨年より25.0ポイント減少している。中学校では50.0%であり、全国（中53.2%）を下回り、昨年より12.5ポイント減少している。

私語のない落ち着いた学習環境は学力向上の基盤である。今後も児童・生徒にきまりを守ることで学習に集中できること、その結果、わかるようになり、学ぶことがおもしろくなることを理解させることが大切である。また、学年が進むことによる学級替えや担任交代等に左右されないよう、校内で統一した取組を行う必要がある。更に、年に2回市内全校（北進小中学校を除く）統一で行っているハイパーQ U検査の結果をよく分析し、学級の状態を常に客観的に把握するとともに、改善策に素早く着手できるよう、校内で結果を共有し、効果的な取組を交流することも重要である。

検証改善サイクルの確立

質問番号	質問事項
17	児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。

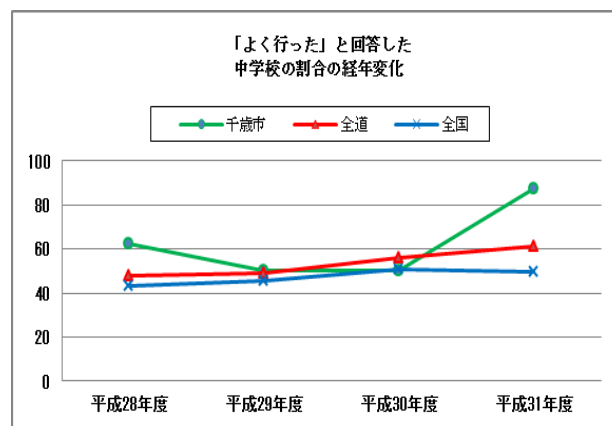
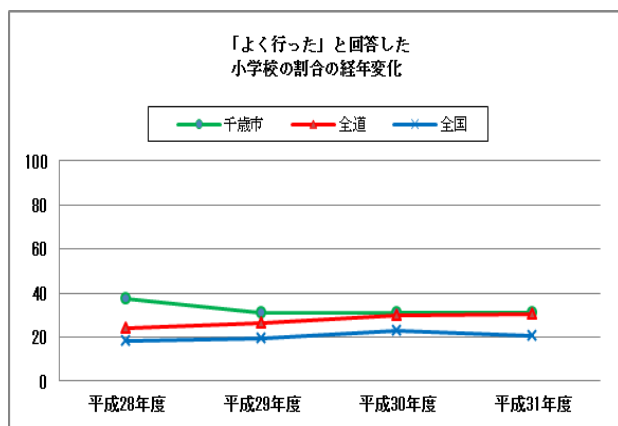
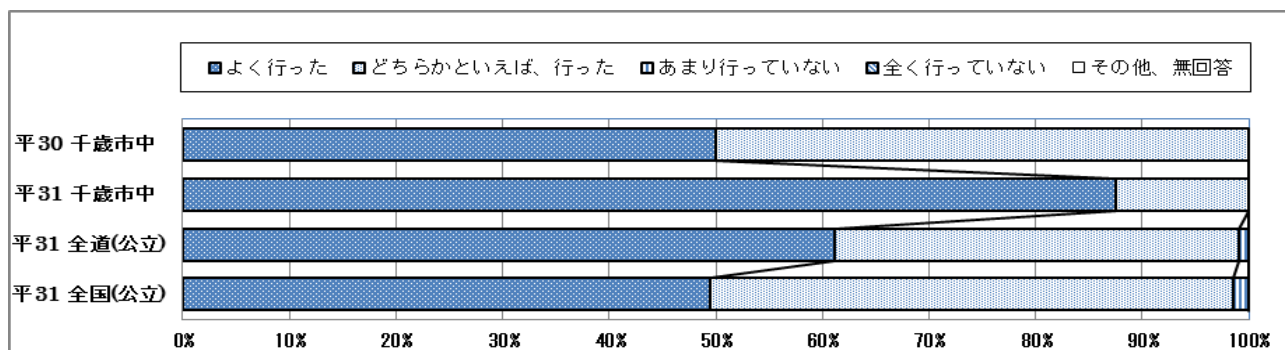
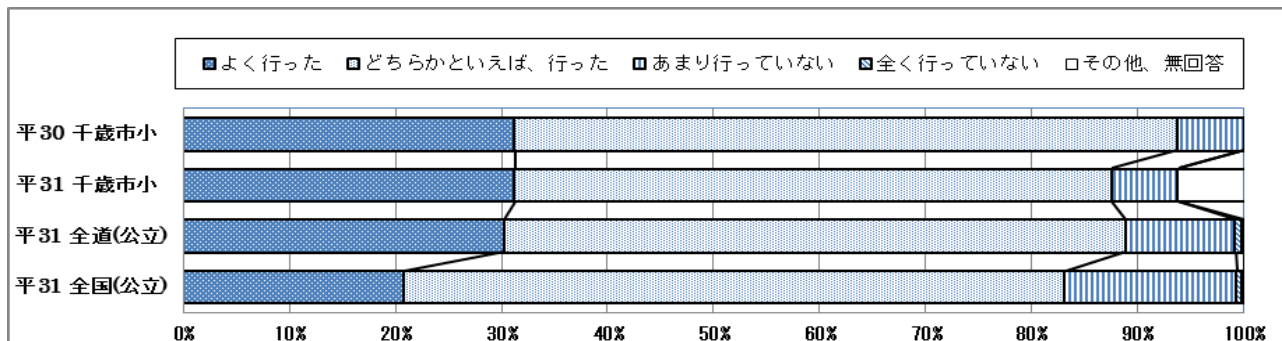


小・中学校ともに全国を上回る取組がなされている

「よくしている」と回答した学校は、小学校 75.0%、中学校 62.5%であり、全国(小 37.3%、中 33.9%)を大きく上回る取組がなされている。学力向上の取組を組織的、計画的に実行し、成果につなげるためには、計画、実施、評価、改善のサイクルの確立が必要である。特に評価活動については、取組の成果を数値により客観的に把握し、実施効果の高い取組は継続し、実施効果の低い取組については改善を図るなどの措置を講じていくことが重要である。そのためには、全国学力・学習状況調査結果はもとより市独自で実施しているNRT標準学力検査、ハイパーQ U検査の分析結果から課題を整理し、具体的な方策を全校一体となって実践するとともに進行管理を徹底し、検証改善サイクルの確実な運用を図ることが大切である。

キャリア教育

質問番号	質問事項
11	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。

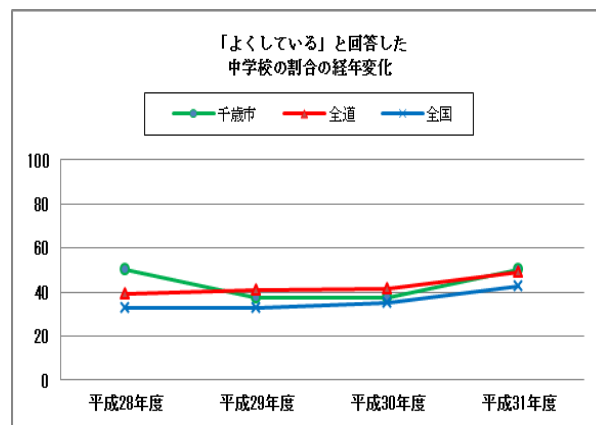
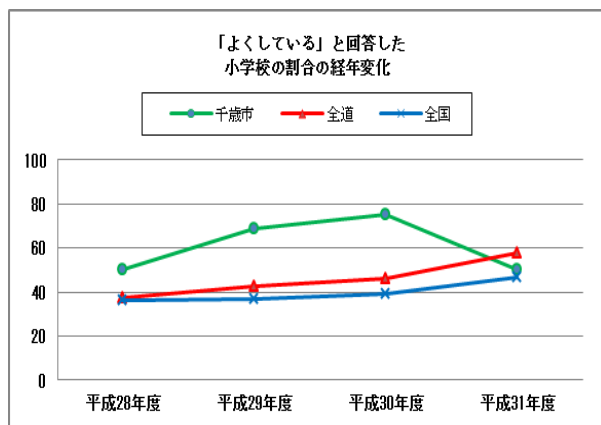
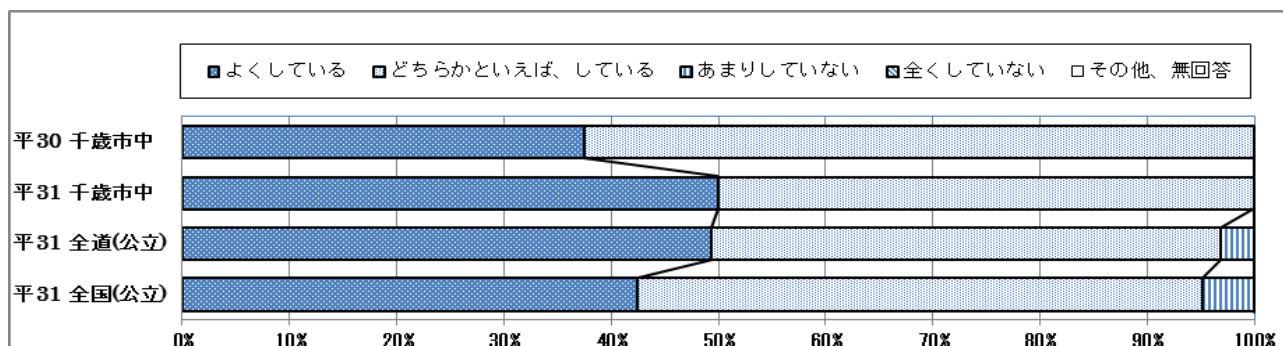
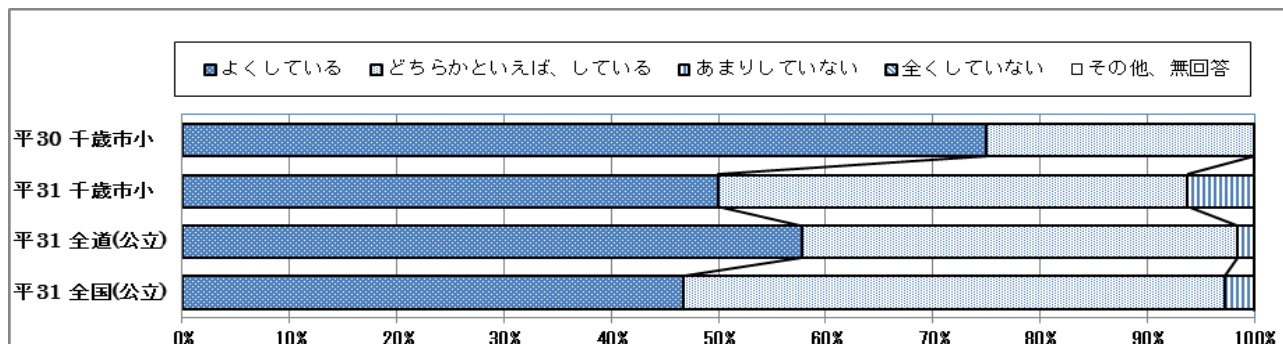


小学校は昨年同様、中学校は全国を大きく上回る取組が行われている

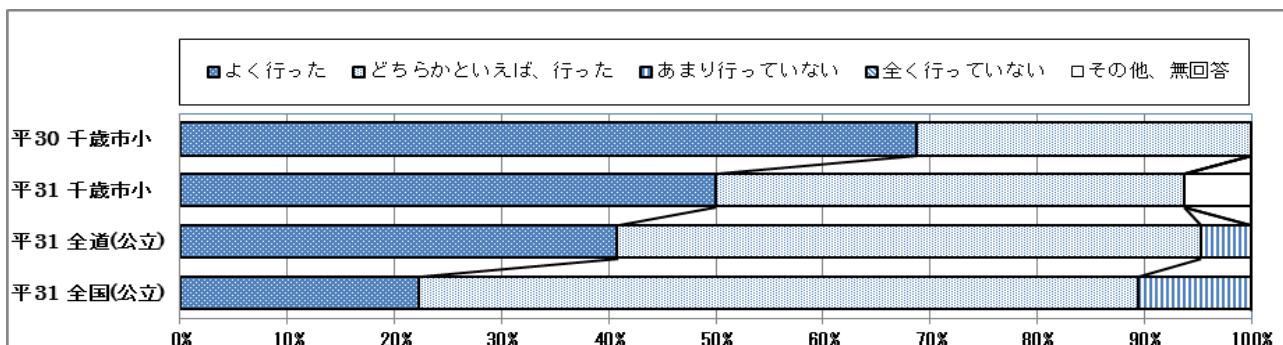
「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をよく行った」と回答した小学校は 31.3%であり、全国(20.8%)を 10.5 ポイント上回っている。中学校では「よく行った」と回答した学校は 87.5%と前年度を大きく上回り全国(49.5%)を 38.0 ポイント上回っている。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を 100 とした指数で小学校においては 95.1 ポイント、中学校では 106.9 ポイントである。夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する将来設計能力の指導については引き続き一層の充実を図る必要がある。各学校においては全ての教育活動が児童生徒のキャリア形成につながっていることをふまえ、道徳教育はもとより、ボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組を通して自尊感情や自己有用感を高め、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることが必要である。

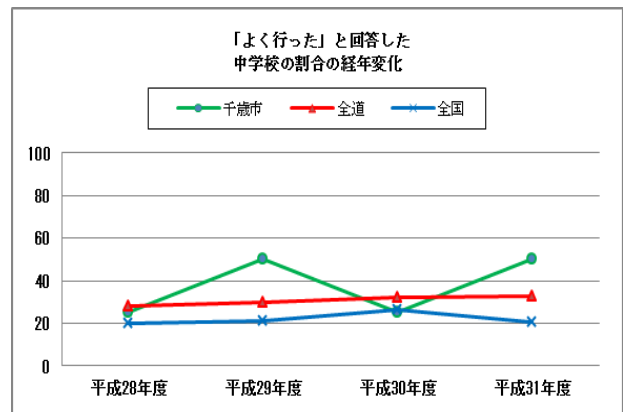
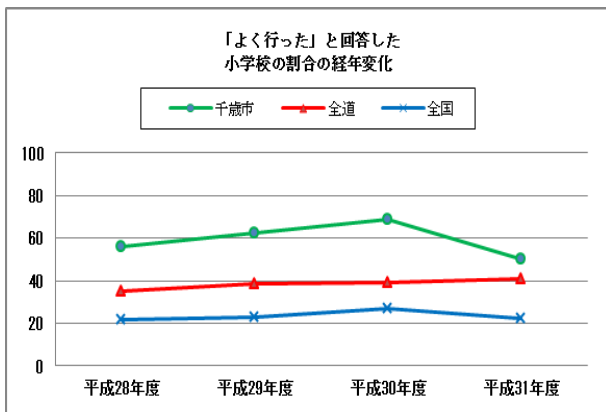
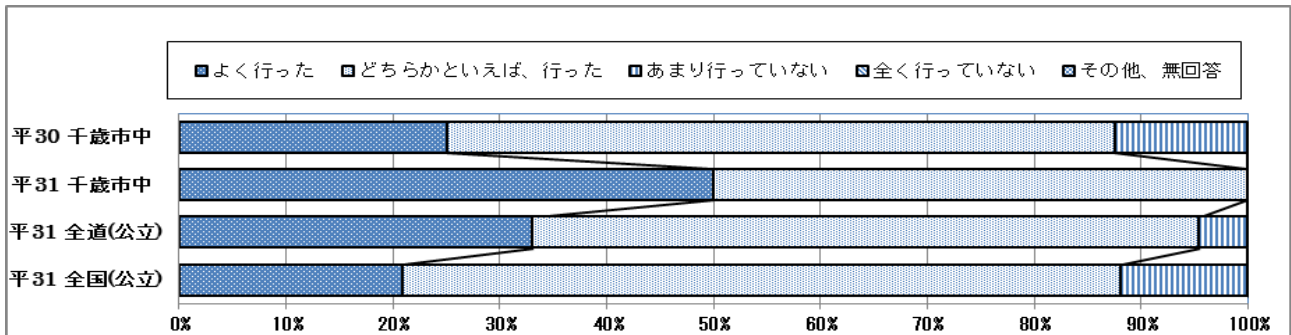
授業改善～言語活動、習得・活用・探求の学習過程

質問番号	質問事項
19	言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか。



質問番号	質問事項
37	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探求の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。





小・中学校ともに全国を上回っているが、一層の充実が求められる

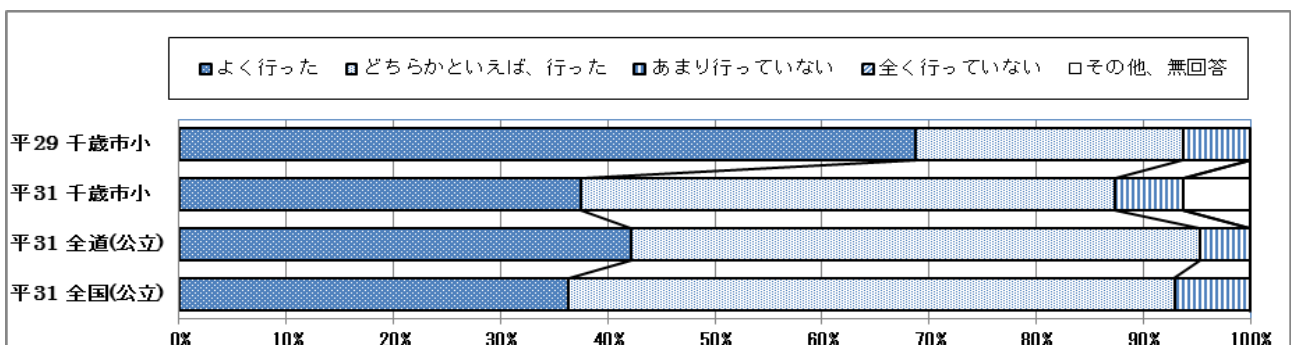
言語活動の取組について「よくしている」と回答した学校は、小学校、中学校ともに50.0%であり、全国(小46.8%、中42.4%)を上回っている。前年度との比較では、小学校は昨年度から25.0ポイント減少し、中学校は12.5ポイント増加した。

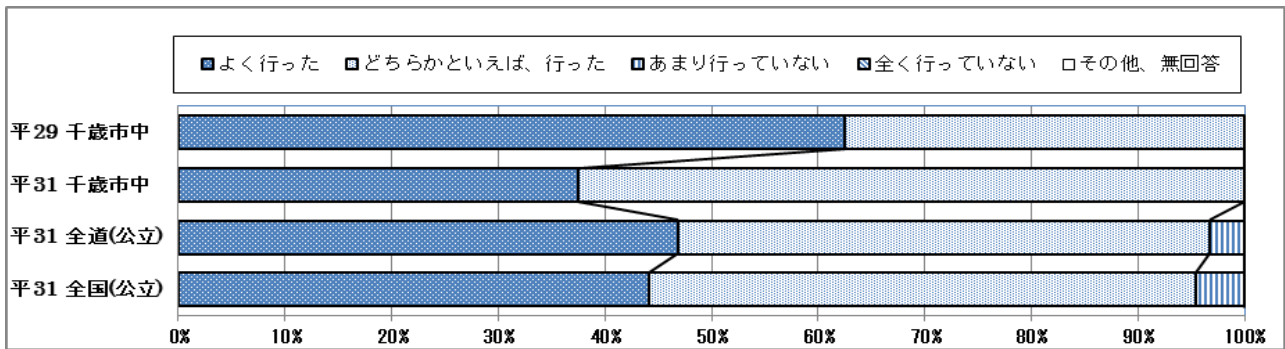
習得・探求の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫を「よく行った」と回答した学校については、小学校、中学校ともに50.0%であり、全国(小22.2%、中20.8%)を大きく上回っている。前年度との比較では、小学校は18.8ポイント減少し、中学校は25ポイント増加した。

各学校では、これまでも様々な教科において言語活動(記録、要約、説明、論述、話し合い等)が行われている。これらの活動の質を高めながら習得・活用・探求という学習サイクルの確立を一層図ることが、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現するポイントとなる。その際、児童・生徒の実態から、活用できるようにしておく必要がある知識や語彙が十分でない場合は、単元において知識の習得にしっかりと時間をかけることに留意する必要がある。

授業改善～国語、算数・数学の指導

質問番号	質問事項
小 4 2	調査対象学年の児童(生徒)に対する国語の指導として、前年度までに、書く習慣を付ける授業を行いましたか
中 4 3	





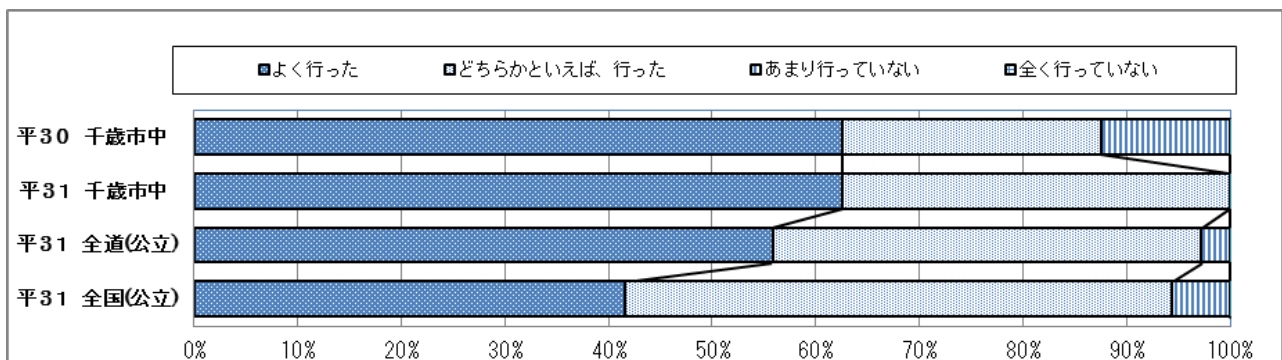
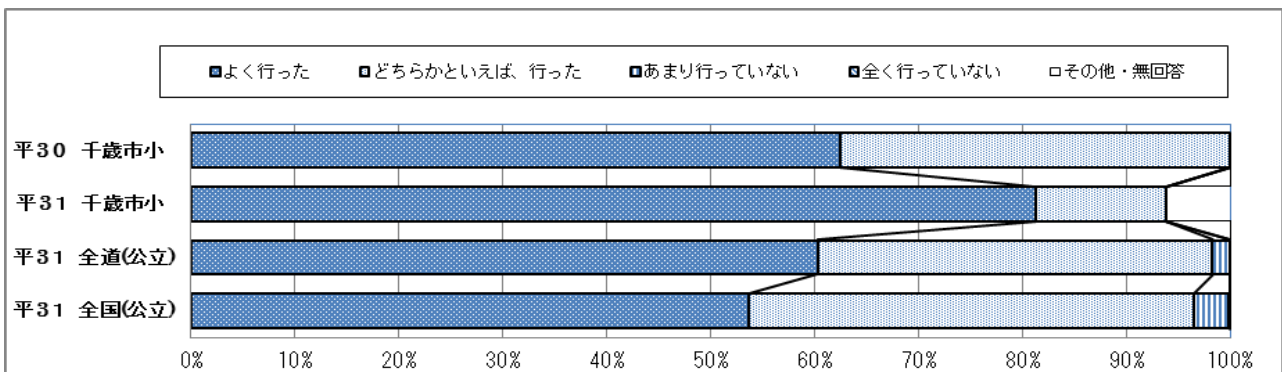
*平成30年度は質問なし

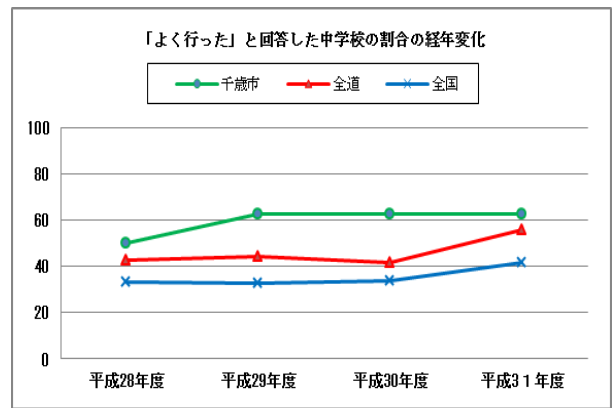
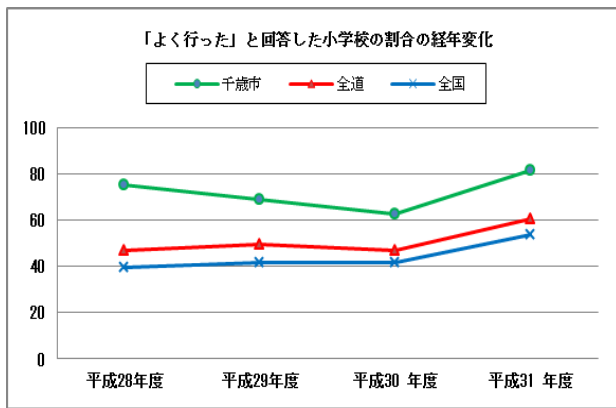
「書く習慣を付ける指導」の充実が求められる

国語の「書く習慣を付ける授業」について、よく行ったと回答した学校は、小学校、中学校ともに37.5%であり、小学校は全国(36.8%)をわずかに上回り、中学校は全国(44.1%)を6.6ポイント下回った。質問項目のあった平成29年度との比較では小学校は31.3ポイント、中学校は25.0ポイント減少した。

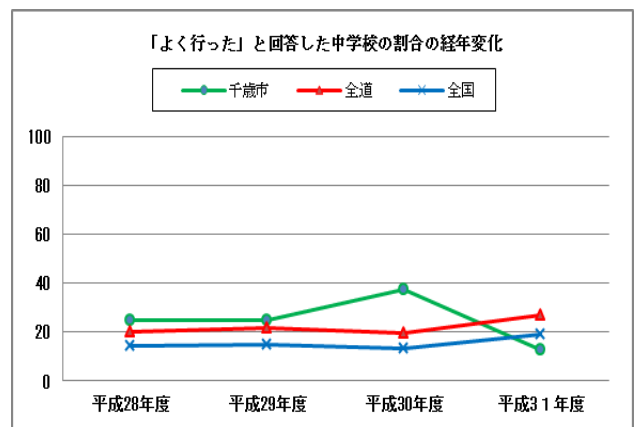
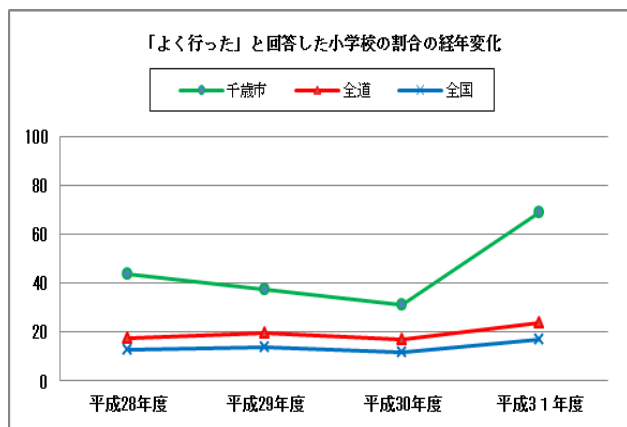
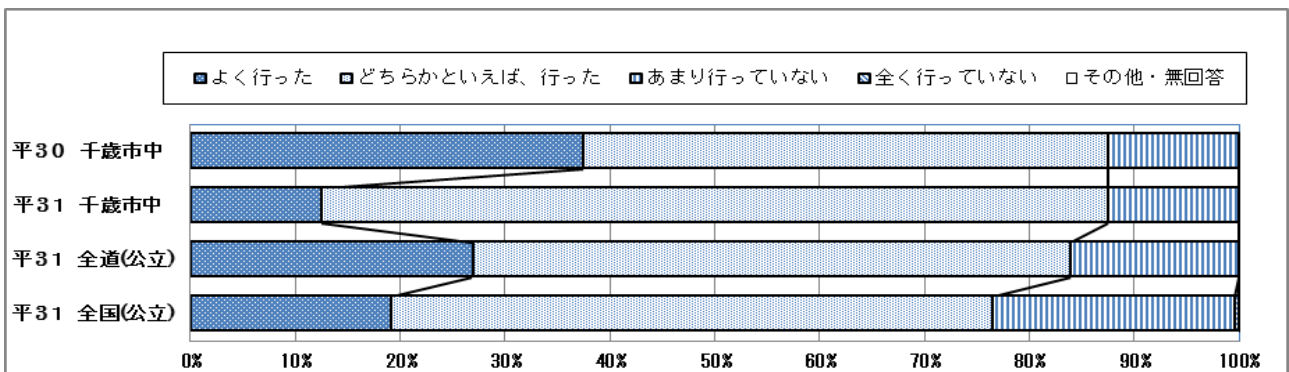
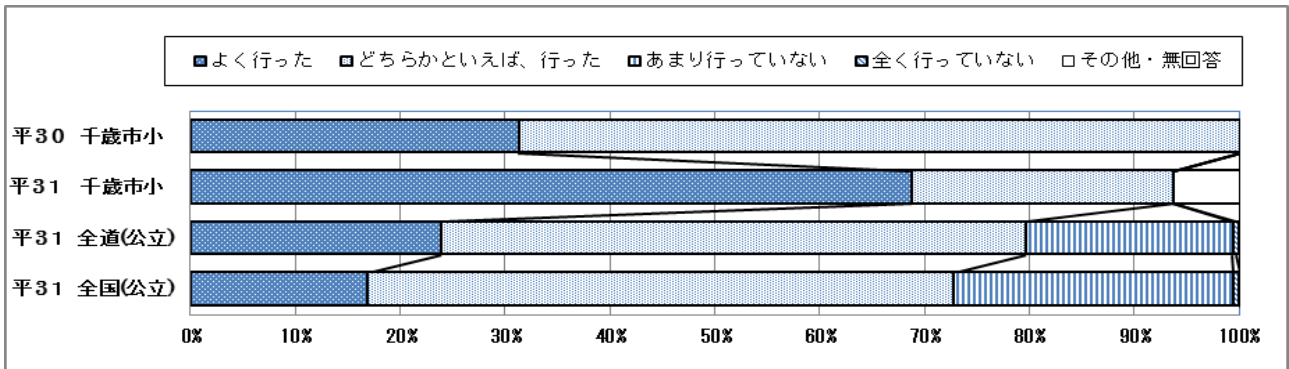
文や文章を書く際には主語と述語の関係に注意するなど、正しく書くことの大切さに気づくことができるようにすることが重要である。そのためには、書いた文章を推敲する学習を繰り返し、書き直したものが読みやすくなり、相手に伝わったということを見ることが必要である。また、事象を説明したり意見を述べたりするなど、考えたことや伝えたいことを書く活動、事実や経験を基に感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味について書く活動などを指導計画に位置付け、書く機会を増やすとともに、書いた文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の改善点やよいところに気付かせ、書く意欲を引き出す指導が大切である。

質問番号	質問事項
小 4 5 中 4 6	調査対象学年の児童(生徒)に対する算数(数学)の指導として、前年度までに、補足的な学習の指導を行いましたか。





質問番号	質問事項
小 4 6 中 4 7	調査対象学年の児童（生徒）に対する算数（数学）の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか。



算数・数学の「補充的な学習の指導」は全国を上回る

算数・数学の指導として、補充的な学習の指導を「よく行った」と回答した学校は、小学校では前年度より18.8ポイント増加し81.3%、中学校では前年度同様の62.5%であり、小・中学校ともに、全国

(小 53.7%、中 41.5%) を上回っている。小学校、中学校ともに学習内容の確実な定着を図るため補足的な学習を重視している状況が見られる。

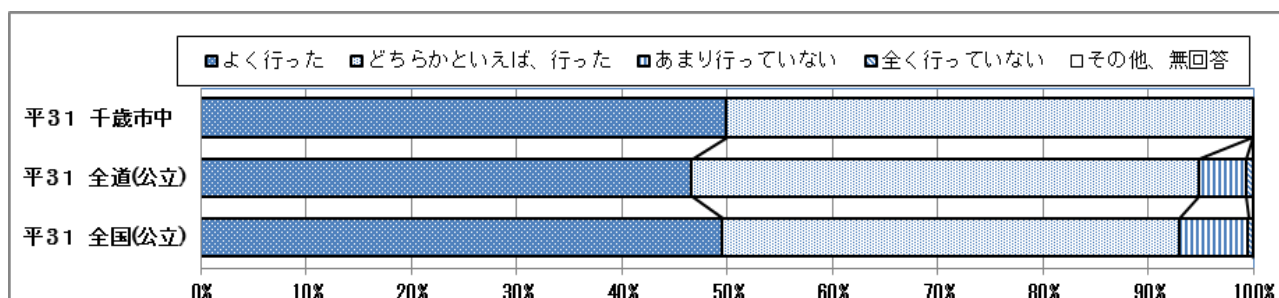
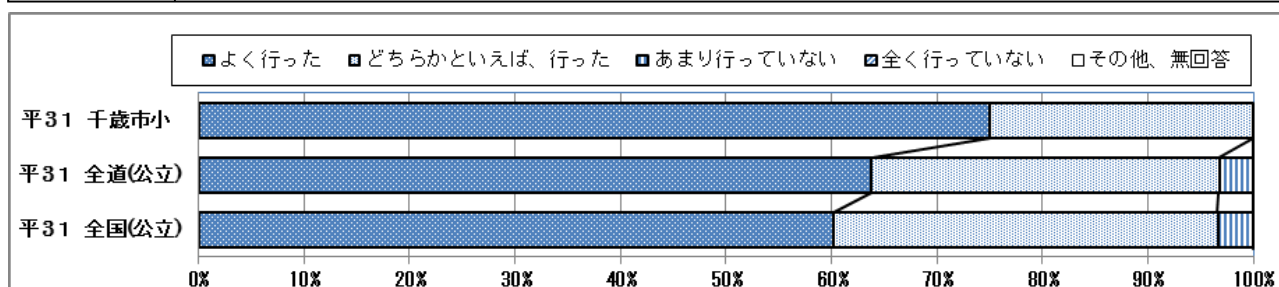
一方、発展的な学習の指導を「よく行った」と回答した学校は、小学校では前年度より 37.5 ポイント増加し 68.8%であったが、中学校については、前年度より 25 ポイント減少して 12.5%であり、全国(小 16.9%、中 19.1%)との比較では、小学校は上回り、中学校は下回っている。

小学校においては、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導が、小規模校を除く市内 13 校で実施されており、習熟の程度に応じた指導が浸透してきている様子が覗える。中学校においても本年 4 月に学習支援員が小規模校を除く 6 校すべてに配置されたことから発展的な学習の指導の充実が期待される。

今後においても、学校種、学校規模に関わらず、個に応じたきめ細かな学習指導や習熟の程度に応じた指導を実施し、学習内容の確実な習得を図ることはもとより、知識を活用して問題を解決する能力を一層高めていくことが必要である。

家庭学習の習慣づくり

質問番号	質問事項
小 62 中 76	前年度までに、調査対象学年の児童(生徒)に対して国語の指導として与えた家庭学習の課題(長期休業中の課題を除きます)についての評価・指導を行いましたか。



*今年度は算数・数学に関する質問なし

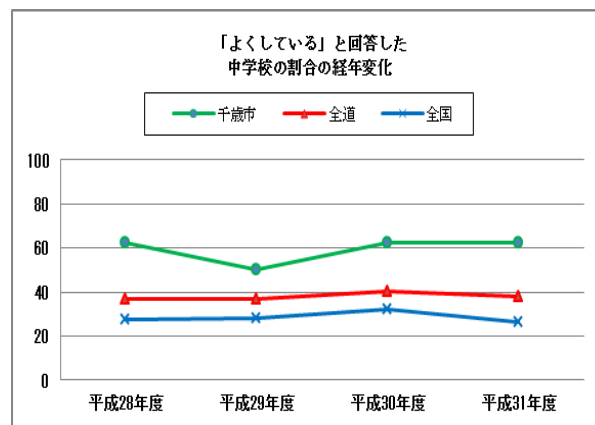
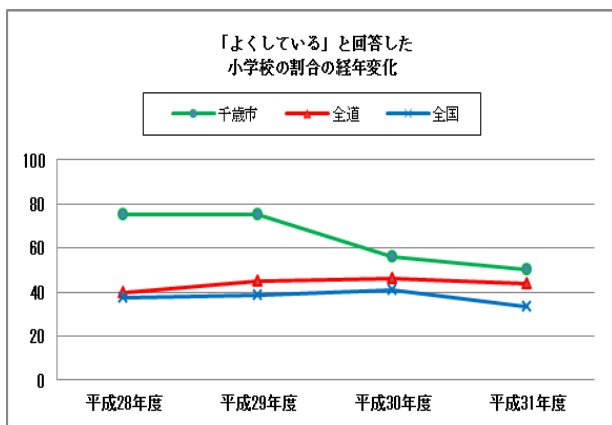
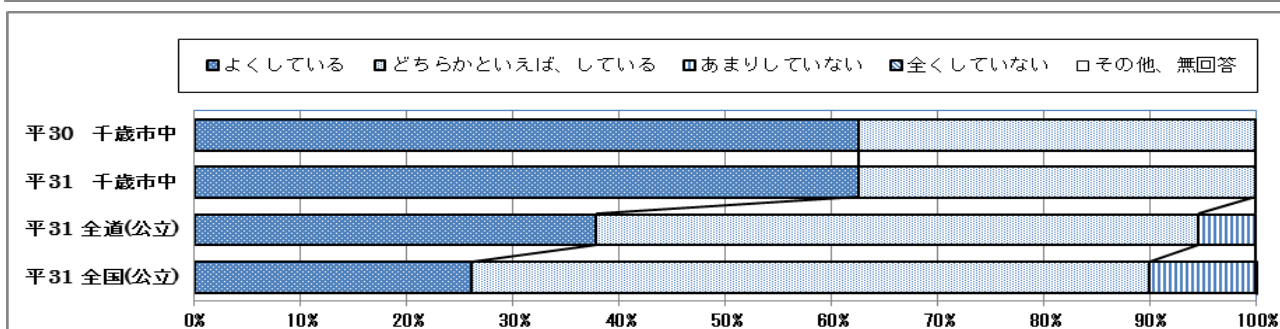
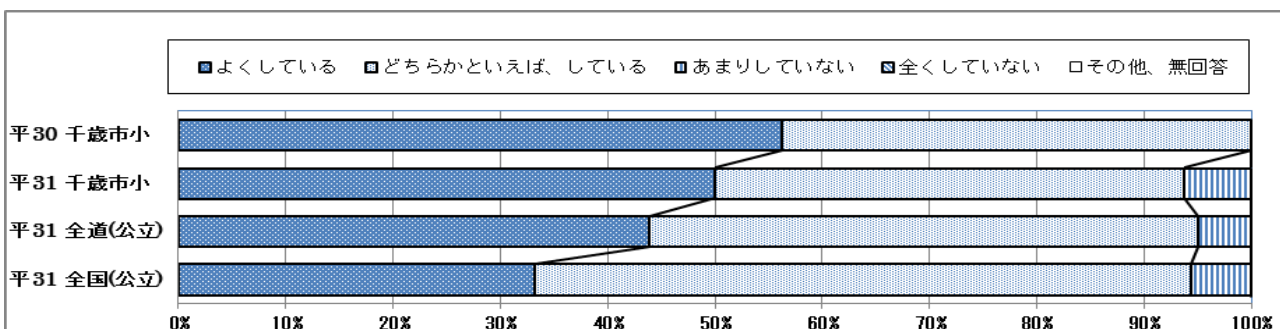
小学校は全国を上回り、中学校は全国と同様である

家庭学習の習慣づくりを「よく行った」と回答した小学校は 75.0%、中学校は 50.0% となっており、全国(小 60.2%、中 49.7%)との比較では小・中学校ともに上回っている。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして課題(宿題)を提供している。これまでも各校においては、家庭学習の習慣づくりや内容の充実のため、「家庭学習の手引き」を作成・配布するとともに、具体例を挙げながら指導したり、学年・学級だよりに家庭学習のヒントを載せたりするなどの工夫・改善を図ってきた。さらに、一人一人の家庭学習の評価・点検のために、ノートを二冊用意させ、提出したノートの採点や点検、励ましの言葉を書くなどの評価を行い、次の日に返却するなどの努力が積み重ねられてきた。

今後は与えた課題（宿題）を生かす授業づくり、理解が不十分な問題については授業等で確認し、期間において再度与えるなど、与えた課題について確実に身に付けさせる仕組みの構築が望まれる。

2 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して 教職員研修の充実

質問番号	質問事項
小 27 中 28	教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか。



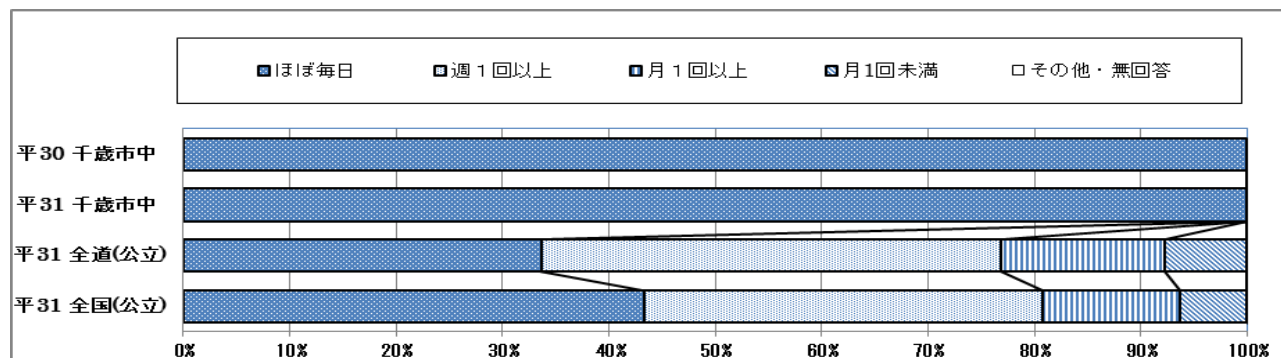
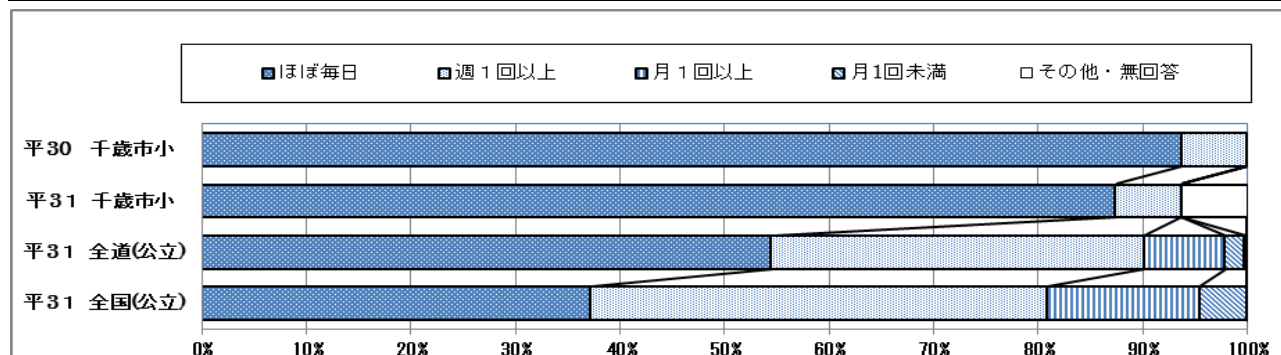
研修結果を生かす取組が行われている

「よくしている」と回答した学校の割合(小 50.0%、中 62.5%)は、小・中学校ともに全国(小 33.2%、中 26.1%)を上回る。前年度(小 56.3%、中 62.5%)との比較では、小学校は6.3ポイント減少し、中学校では同様であった。いずれも教員の研修については長期休業中に開催される千歳市教育委員会主催の研修や石狩教育研修センター主催の研修に参加し、個別の学校では招聘できない全国的に著名な講師から直接教示を受けたり、授業期間には少ない時間を有効に活用したミニ研修や授業研究に取り組んだりしており、今日的課題に対応できる能力や授業力向上を目指す研修の充実が図られている。今後は、

個々の教員が受講した研修の結果を積極的に校内全体に還元し、授業改善に結びつく指導方法や教育課程の見直し、より促進される校内の研修体制を構築していく必要がある。

ICT機器の活用

質問番号	質問事項
小 49 中 63	調査対象学年の児童（生徒）に対する指導において、前年度に教員が大型提示装置（プロジェクター、電子黒板等）等のICTを活用した授業を1クラスあたりどの程度行いましたか。



*平成30年度からの質問

小・中学校とも積極的に活用されている

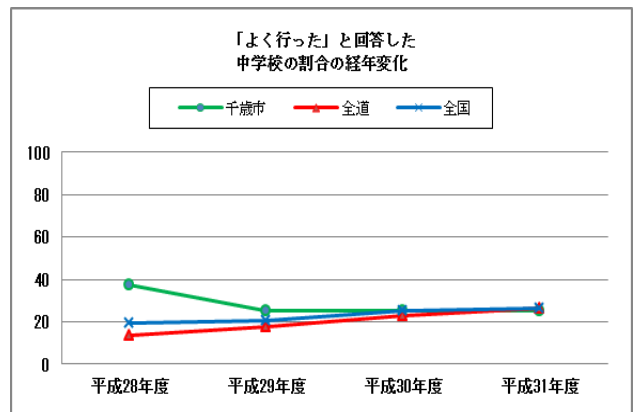
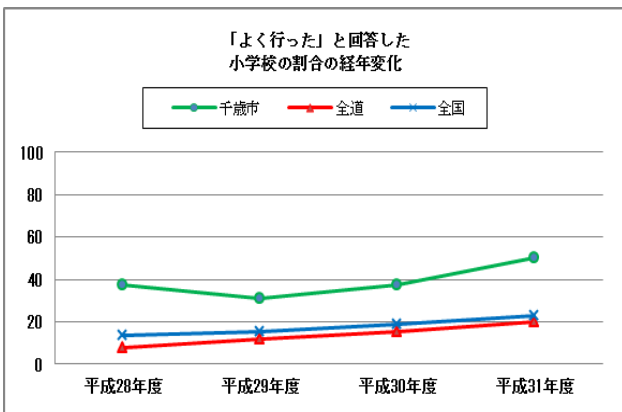
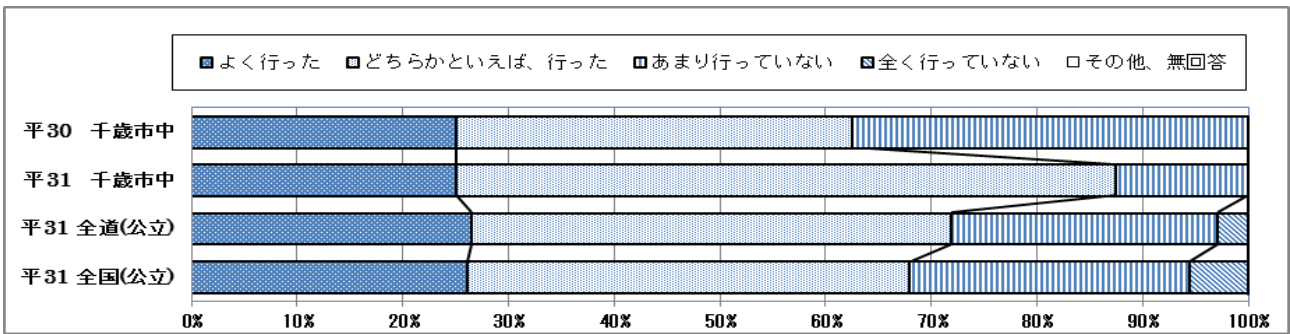
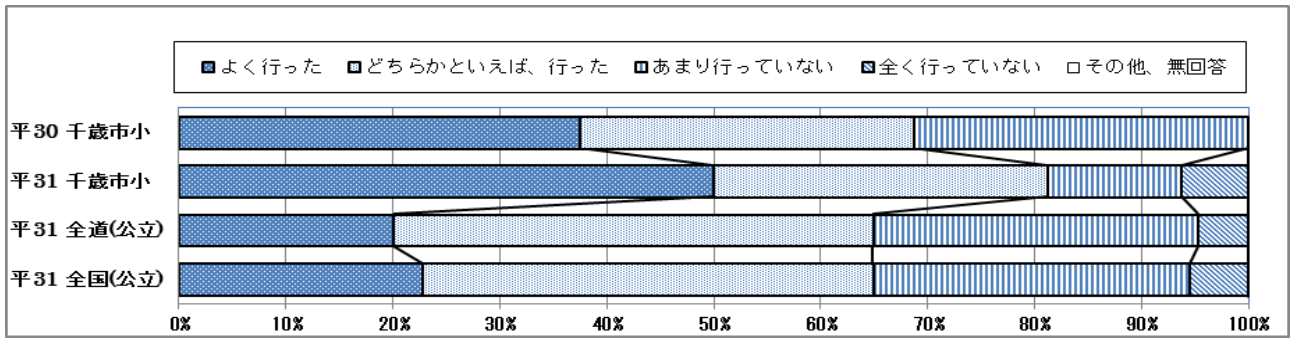
「ほぼ毎日」と回答した学校は（小 87.5%、中 100%）であり、全国（小 37.1%、中 43.3%）と比較しても小・中学校ともに積極的に活用されている。

本市では、全普通教室に加え、小学校少人数指導用教室、小・中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への電子黒板・実物投影機等が配備され、デジタル教科書についても、平成28年度までに小・中学校への配備を終えたことから、全国、全道に比べて圧倒的にICT機器の活用頻度が高く、千歳の教育の特色となっている。今後は、授業でのより効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、授業改善に生かす取組を進めることが大切である。

3 小中連携・一貫教育の取組に関して

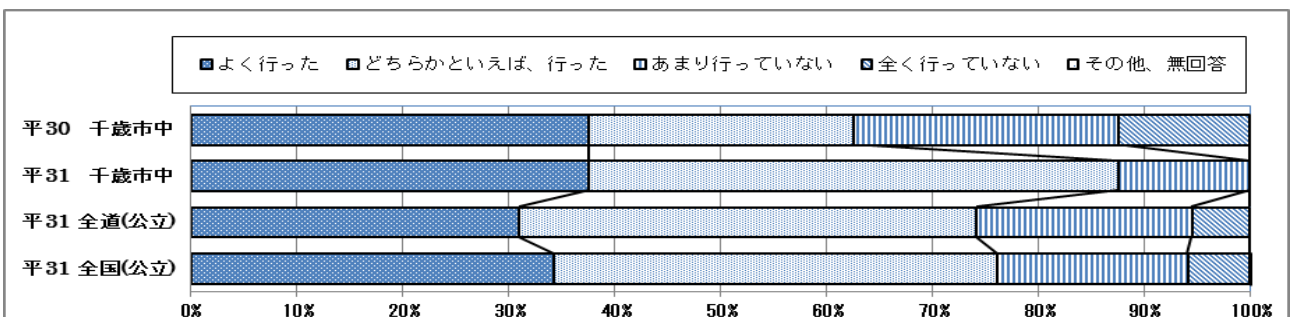
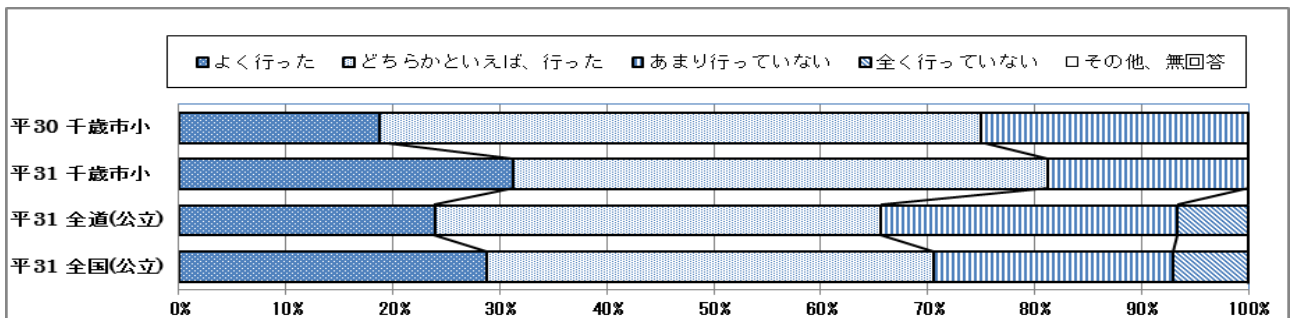
教育課程に関する共通の取組

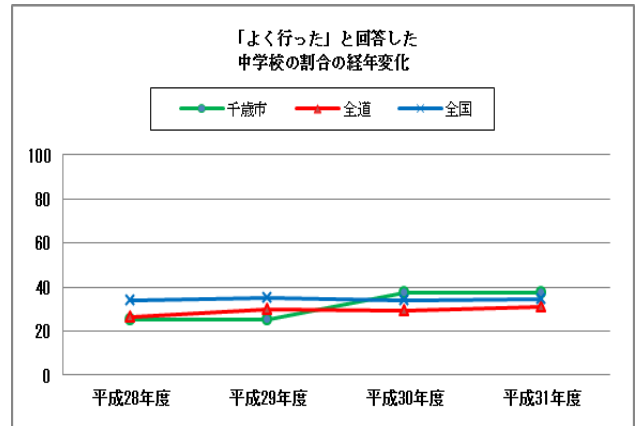
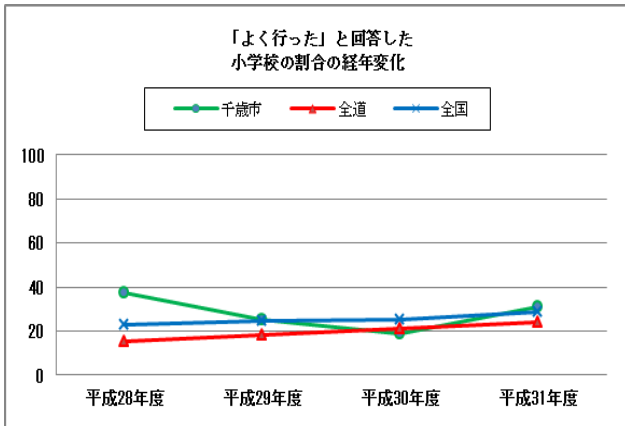
質問番号	質問事項
小 51 中 65	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。



合同の研修

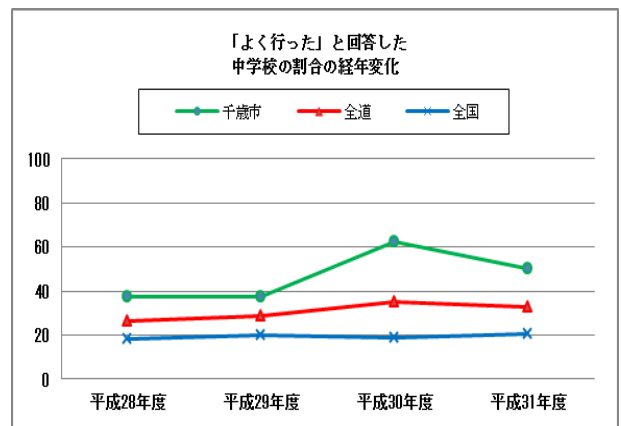
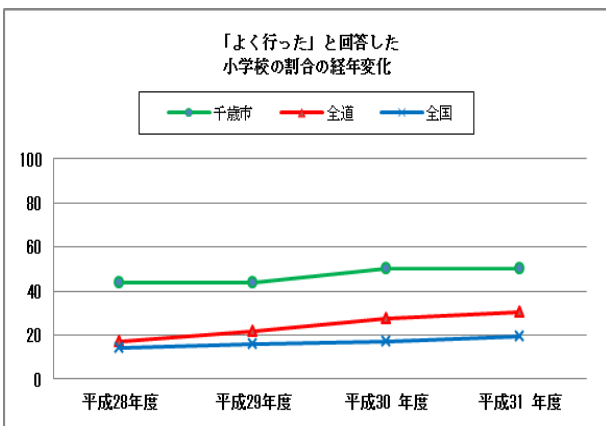
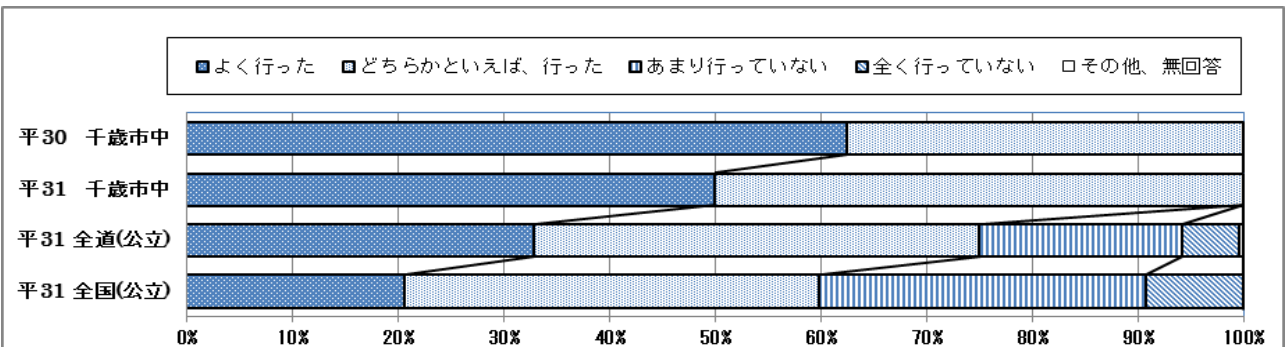
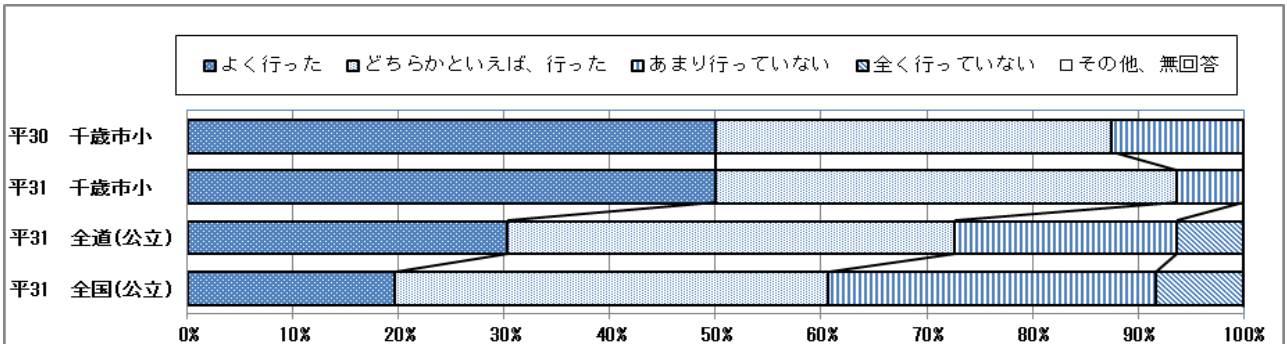
小 5 2	前年度までに、近隣等の中(小)学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。
中 6 6	





全国学力・学習状況調査分析結果の共有

質問番号	質問事項
小 5 3 中 6 7	平成 30 年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有しましたか。



小中連携・一貫の取組は今後深まっていくことが期待される

「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」という質問に対して、「よく行った」と回答したのは、小学校で50.0%、中学校で25.0%であり、全国（小22.8%、中26.1%）と比較して、小学校は全国を上回っており、中学校はやや下回っている。

「前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行ったか」という質問に対して「よく行った」と回答したのは、小学校で31.3%、中学校では37.5%であり、全国（小28.8%、34.3%）と比べて小学校、中学校ともに上回っている

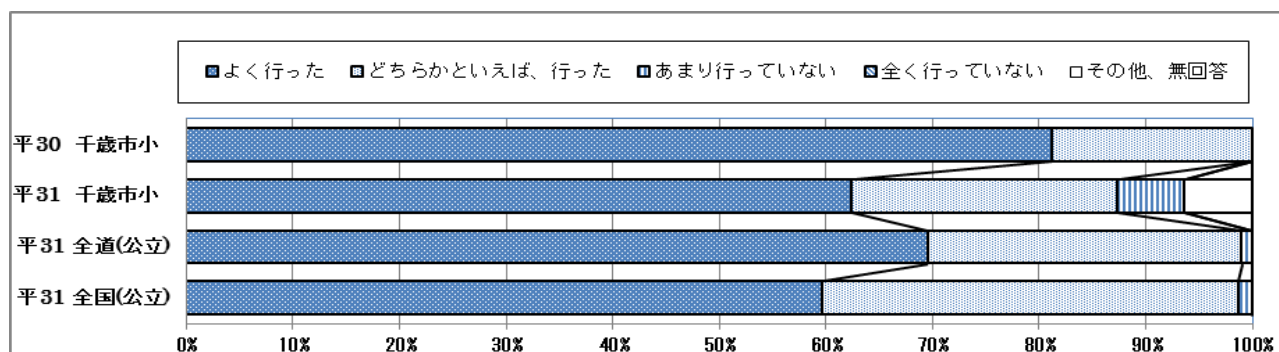
「平成30年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有したか」という質問では、「よく行った」と回答したのは小学校、中学校ともに50.0%であり、全国（小19.6%、中20.7%）を大きく上回っている。

小中連携・一貫教育の取組に関しては、以前から連携を進めてきたが、市として昨年度からモデル校区を指定し、本格的に取り組み始めたところである。今後は、全国学力・学習状況調査結果の共有をはじめとして、校区の子どもたちの義務教育9年間で身に付けさせるべき力を明確にして、授業や教育課程について連携して取り組んでいくことが一層望まれる。

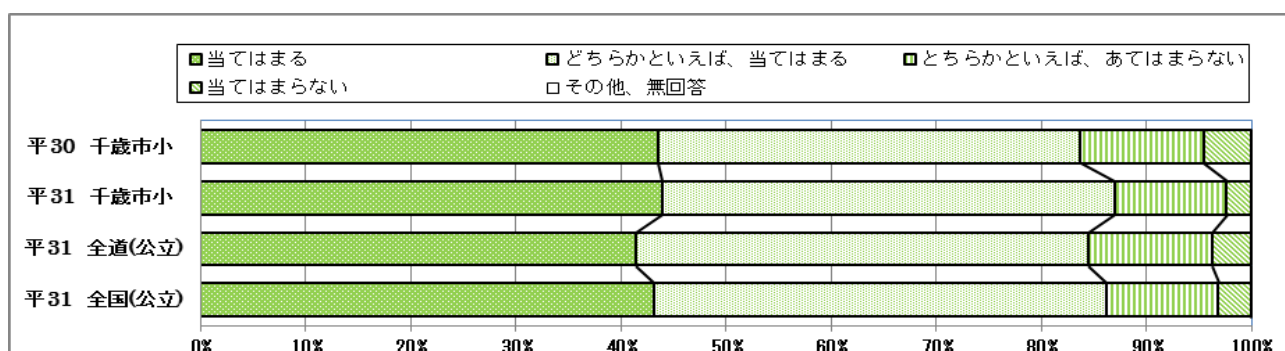
4 授業や評価に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問紙の回答と比較）

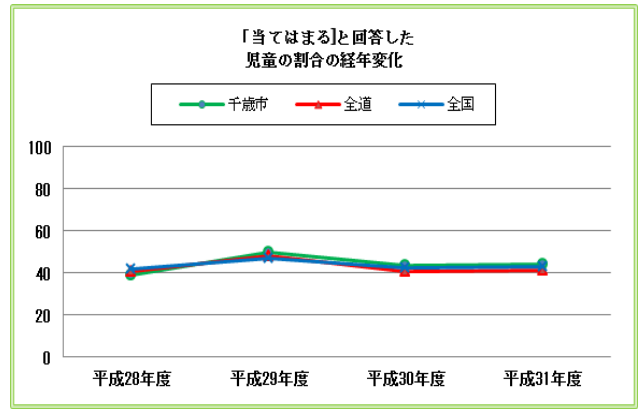
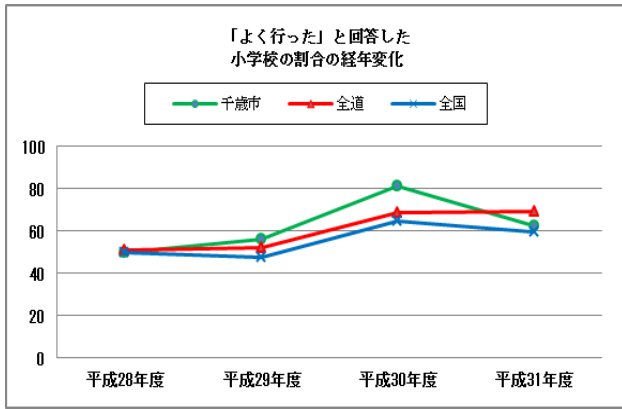
良さの評価

質問番号	質問事項
14	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、学校生活の中で児童一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行いましたか。

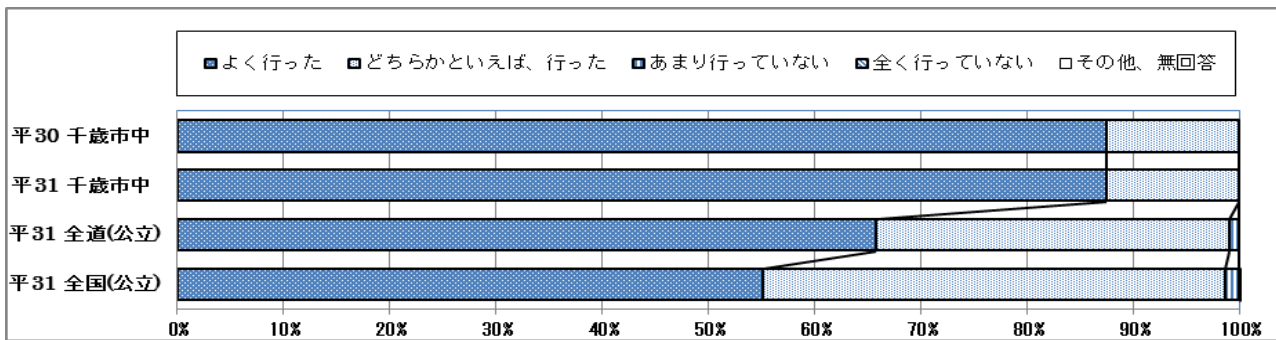


質問番号	質問事項（*児童質問紙）
6	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。

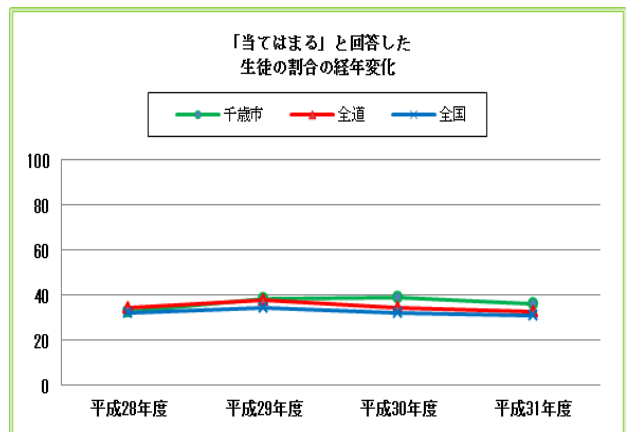
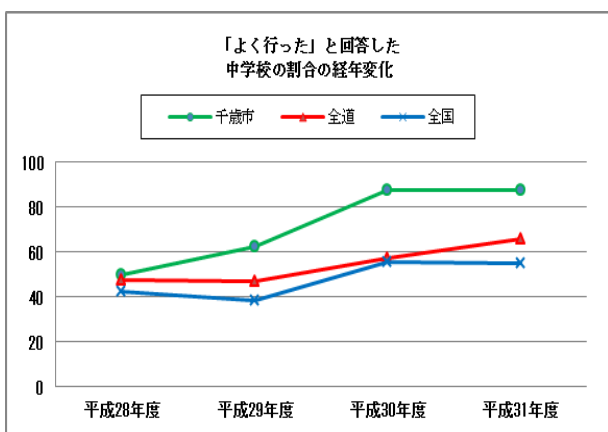
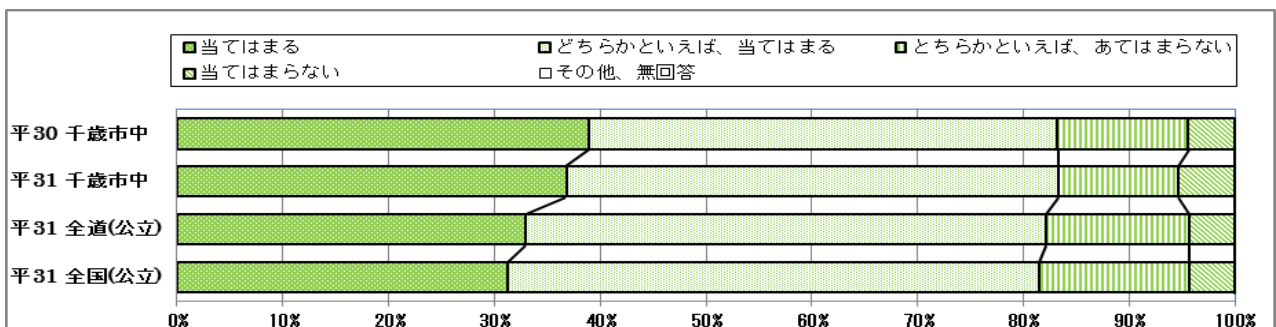




質問番号	質問事項
14	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学校生活の中で生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行いましたか。

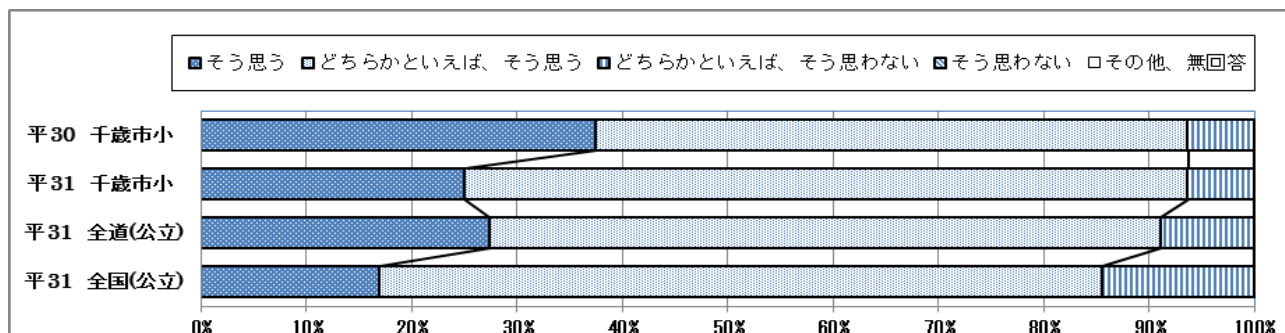


質問番号	質問事項（*生徒質問紙）
6	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。

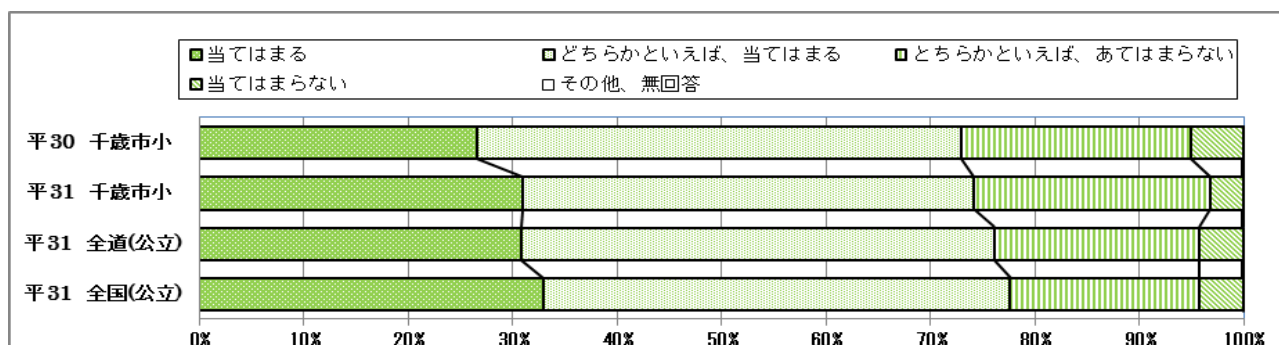


主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善

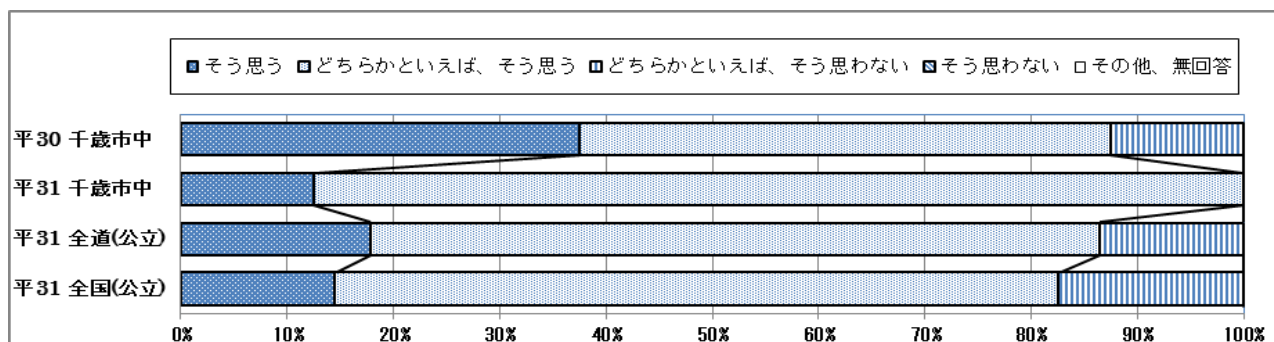
質問番号	質問事項
32	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



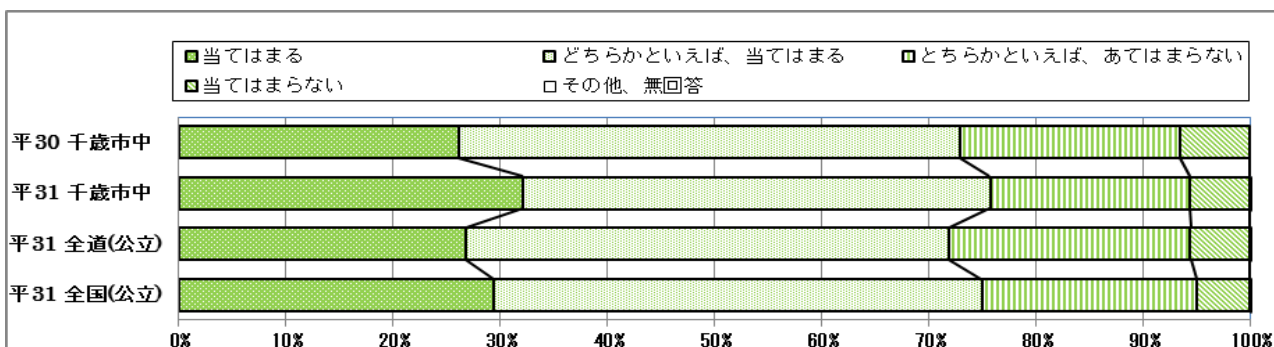
質問番号	質問事項 (* 児童質問紙)
35	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



質問番号	質問事項 (* 学校質問紙)
33	調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



質問番号	質問事項（*生徒質問紙）
37	1, 2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



平成30年度からの質問

評価や授業に対する教師と児童・生徒の意識の差は、小学校は縮小し、中学校は改善の傾向が見られるものの依然として差が大きい

「よさの評価」では、学校質問紙における「学校生活の中で児童・生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行ったか」という質問に対して、「よく行った」との回答は、前年度にくらべて小学校は25.0ポイント減少し62.5%、中学校は6.2ポイント増加し87.5%である。一方、児童・生徒質問紙で「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思うか」との質問に対して、「当てはまる」と回答した小学生は前年度より0.5ポイント増加し44.0%、中学生では2.1ポイント減少し36.8%である。教師と児童・生徒の意識の差は小学校18.5ポイント、中学校50.7ポイントであり、小学校はその差が縮まったが、中学校は依然としてその差が大きい。

「調査対象学年の児童・生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思うか」という質問に対して小学校は前年度より12.5ポイント減少して25.0%、中学校は25.0ポイント減少して12.5%である。児童・生徒質問紙の「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は前年度より4.4ポイント増加して31.0%、中学生は前年度より6ポイント増加して32.1%である。教師と、指導を受ける児童・生徒との意識の差は、小学校は6.0ポイント、中学校は19.6ポイントであり、小学校はその差が縮まり、中学校も改善の傾向が見られる。

このような状況から、各教科等の授業や特別活動などにおいて、児童・生徒一人一人の思考や活動が活発に展開され、個が認められる場を創出すること、学習の成果や活動の様子等を発信し努力の大切さを認め合う雰囲気を醸成することなど、子どもの自己有用感を高める手だてを工夫するとともに、自他ともに納得できるほめ言葉、子どもに伝わる言葉を吟味し、それぞれの発達段階に応じた積極的な評価を各学校で確実に行うことが大切である。

また、児童・生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層、子どもの視点に立った状況分析を的確に行うと同時に、すべての児童・生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、「書く」「話す」「発表する」などの発信型の活動に関わらせる授業を構築する、さらに児童・生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう、自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなどの工夫・改善を積み重ねていく必要がある。